

インドでグリーンファーマーと慕われる

杉山龍丸の偉業①-⑥

第1部 幻の隼飛行戦隊

川島 順 予科21-7
(越谷市) 航空7-1

はじめに

昨年(2011年)の11月4日、「インドのグリーンファーマー」というテレビ東京のテレビ番組を見ました。その内容は、一日本人が私財を投じてインド北部の荒地を緑化したと云う話です。その一日本人の崇高な精神と行動力に感動しました。

新聞のテレビ欄にはその日本人の名前は紹介されていなかったが、杉山龍丸という一寸変わった名前の記憶を頼りに、インターネットで探してみると、「杉山龍丸」に関する多くの文献が見つかりました。その一つに、杉山氏の略歴に「士官学校出」とありました。もしやと思い、私の手元にあった昭和51年度の偕行社名簿で探してみると、「杉山竜丸53」が見つかり、53期の欄を見ると「杉山龍丸 福岡市… 国際文化福祉協会 総事務局長 日本区理事長」とあり、本人に間違いのないのが確認されました。

それでは偕行誌にも紹介されていないかと思い、私が、10年ほど前に偕行誌の目次の電子化を提案し、見本として入力した昭和41年から平成3年までの目次CD-ROMを「杉山龍丸」で検索してみると、次の3件が検索されました。『偕行：昭和57年10月号6～13頁、「特攻秘話(4) 比島捷号陸軍航空作戦における特別攻撃隊の記録」53期杉山龍丸』、『偕行：昭和63年9月号38～42頁、「比島捷号陸軍航空作戦において見聞した特攻隊の記録」杉山龍丸』、『偕行：昭和63年10月号18～22頁「比島捷号陸軍航空作戦において見聞した特攻隊の記録②」杉山龍丸』。

更に、念の為に「杉山」だけで検索してみると、次の2件がさらに検出されました『偕行：昭和53年5月号60頁、53期花だより「杉山竜丸君の努力と壮挙実る／インドで植樹に成功。」』、『偕行：昭和58年1月号、10頁、「砂漠緑化の夢」53期杉山竜丸』。

以上の知見から、杉山龍丸氏は「インドのグリーンファーマー」の偉業を成し遂げる以前に、軍人として、飛行第31戦隊の整備隊長として、多くの実績を挙げると共に、特にレイテ決戦で大活躍した事が判明しました。

「インドのグリーンファーマー」に付いてはご子息の杉山満丸氏の著書『グリーン・ファーマー インドの砂漠を緑かえた日本人・杉山龍丸の軌跡』に克に紹介されています。しかし、この書には「飛行第31戦隊」については殆ど触れられていない。

しかし、インターネット上で見つけた杉山龍丸アーカイブに「幻の戦闘機隊」という杉山龍丸氏が戦後まとめた手記の存在を知り、それをダウンロードしました。これは、A4300枚と膨大なものであるが、この記録は、杉山氏が従軍中書き綴った飛行第31戦隊(陸軍一式戦闘機(隼))の整備日記を基にして戦後記憶を辿って書き足して作成したもので、飛行第31戦隊の誕生から終焉までを克明に記録されています。

そこで、この手記の内容を要約し、軍人としての「杉山龍丸」の足跡を秩父誌上に第1部「幻の戦闘機隊」として、紹介すると共に、グリーンファーマーとしての「杉山龍丸」については、杉山満丸氏の著書を中心にして各種資料を総合して、杉山龍丸氏の人物像を追求し、秩父誌上で第2部「インドのグリーンファーマー」として連続して掲載してみたいと思いたった次第であります。

なお、杉山龍丸をテーマにしたテレビは前記以外に2011年2月17日NHK・BSで「トライ・エイジ～三世代の挑戦」の第3話「杉山家三代の物語」等で紹介されていますが、我々の先輩にこのような素晴らしい人物が居られたことを誇りに思い敢えて拙文を披露致します。

なお、文中“§・・§”の文章は杉山龍丸氏の手記『幻の戦闘機隊』の内容をほぼそのまま引用した箇所を示す。

目次(秩父127号～132号)

第1部 幻の隼飛行戦隊

- I. 杉山龍丸の生い立ち
- II. 飛行第31戦隊
 - 1 飛行第31戦隊の歴史
 - 2 杉山龍丸隼整備隊長の誕生
 - 3 飛行第31戦隊比島への転進(127号)
 - 4 比島展開時の戦局

- 5 決戦への準備
- 6 第58米海軍機動部隊との前哨戦(128号)
- 7 ファブリカ基地米機に急襲される
- 8 台湾沖航空戦
- 9 捷一号命令(第1次レイテ総攻撃戦)
- 10 第2次レイテ総攻撃戦(129号)
- 11 第3次レイテ総攻撃戦
- 12 米軍ミンドロ島を急襲(130号)
- 13 飛行第31戦隊の編成替え
- 14 コンソリデーテッドB24の来襲
- 15 B24の直撃爆弾を受ける
- 16 ノースアメリカンB25の来襲
- 17 飛行第31戦隊の編成替え
- 18 幻の隼戦闘機隊
- 19 米軍護送船団リングエン湾に迫る
- 20 米軍リングエン湾に上陸開始
- 21 戦隊最後の特攻隊・精華隊出撃(131号)
- 22 続幻の隼戦闘機隊
- 23 ルソン島の情勢
- 24 現地自活生活の訓練
- 25 幻の戦闘機隊の終焉(132号)

第1部 幻の隼飛行戦隊

I. 杉山龍丸の生い立ち

(以下杉山龍丸氏の事を愛情を込め龍丸と略称します)

龍丸は1919年(大正8年)5月26日福岡市に生まれる。父は作家の夢野久作(本名泰道)で、祖父は伊藤博文とも親交が深く政界のフィクサーともいわれた杉山茂丸である。

1937年(昭和12年)福岡中学校(現福岡県立福岡高等学校)卒業後、同年陸軍予科士官学校に入校、1940年(昭和15年)陸軍士官学校(53期)を卒業し、北満洲の嫩江(のんこう)にある飛行第31戦隊に入隊した。



杉山家三代の当主

II. 飛行第31戦隊

1 飛行第31戦隊の歴史

龍丸の入隊した飛行第31戦隊は昭和13年、97式軽爆撃隊として、北支の南苑で誕生し、支那事変、ノモンハン事件、ついで大東亜戦争緒戦に、支那、満洲、仏印、泰、ビルマの

各地に転戦して赫々たる戦果を挙げた。昭和17年に99式襲撃機隊に、昭和18年9月に戦闘機隊に改編され、白城子基地に移駐した。そして昭和19年3月隼戦闘機隊に改組され、同年4月再び嫩江基地に移駐した。

昭和19年6月8日、比島転進の命令を受け、第4航空軍、第2飛行師団の隷下に入る。



満洲の地図

2 杉山龍丸隼整備隊長の誕生

龍丸は、飛行第31戦隊の飛行機整備の技術を習得するために立川の陸軍航空技術学校に派遣され、昭和18年4月乙種学生を卒業する。この出向期間中の昭和17年に、戦争反対を近衛文麿、広田弘毅、頭山満等に直訴して憲兵に拘束され処罰を受けるという逸話もある。この動機は、ビルマ戦線等で捕獲した米、英、仏等の航空機、戦車、火砲等は技術的にも装備の上においても到底、真正面から戦った場合勝算がない事を技術将校の龍丸は見抜いていたからである。

同年12月、一式戦隼の整備技術習得のため明野飛行学校に整備の部下を引き連れて出向した。しかし、実戦経験の浅い新藤常右衛門教官とは、整備兵の訓練内容が緊迫した戦場での実情に合わずと大喧嘩になり、明野飛行学校長の青木武三将軍と正面衝突して、昭和19年1月末に白城子に帰ってきてしまった。

龍丸のこの危惧は、フィリピン、サラビア基地で、富永第4航空軍司令官の視察中、新藤飛

行団長率いる四式戦20機が飛行場に並べられたまま敵機の機銃掃射を受けて14機が破壊されるという形で現実のものとなった。

昭和19年3月隼戦闘隊に改組された飛行第31戦隊は満洲のハイラルの北にある嫩江基地に移転すると共に、龍丸は整備隊隊長となる。

当時の飛行隊は空中勤務者が主導権を持っており、整備将校には全く指揮権がなかったため、整備員は操縦士の単なる下働きとしてこき使われていた。龍丸の進言によって整備隊として初めて飛行戦隊の中に独立した組織が生まれ、それを束ねる龍丸の権限によって自由な活動ができるようになった。

3 飛行第31戦隊比島への転進

3-1 飛行機隊の転進

昭和19年6月8日比島への転進の命令を受け、飛行機隊約40機が上海経由で、ルソン島のクラーク基地に進出、7月31日ネグロス島のファブリカへ集結した。

3-2 地上部隊の転進

同時に、杉山龍丸整備隊長の率いる地上部隊は数台の貨車で嫩江駅を出発、ハルピン、白城子、奉天を經由し、南鮮の釜山に集結、8千噸の扶桑丸に乗船して比島に向かうことになった。龍丸は副輸送指揮官を任命されていた。

台湾の高雄港で停泊し他の船と共に船団を組み7月3日の夜、比島に向け出港した。船団の総数は36隻で、3列の輸送船団の周囲を5隻の駆逐艦、掃海艇が護衛していた。敵潜水艦の魚雷攻撃を避けるため、ジグザグに進路を変更して進む。数日した夜間、2千噸級の輸送船と規格船（戦時中大量生産用の船）とが衝突、輸送船が大破し、それを掃海艇が曳航して高雄へ引き返すことになった。その結果、船団は34隻となり護衛艦艇は4隻に減少した。

7月28日、船団はバシー海峡を通過してバタン諸島の西側を進み、7月30日夜、ルソン島の北端のアパリ港の西北海域、米潜水艦が待ち構えている危険海域に入っていく。

非常の場合を想定して、身の整理と救命胴衣の着け方、携行品の整備その他の点検を行うと共に、対潜警戒姿勢、非常攻撃待機姿勢、退船の場合の集合等について確認し、警戒に応じた行動訓練を行った。

3-3 扶桑丸の遭難

翌31日の朝4時頃、突然未だ暗い海面に夜

光虫の光の輪が幾重にも重なって船をめぐらせて進んできた。これは、米潜水艦が発射した魚雷の衝撃音が夜光虫の光を誘発したためである。どの船かに魚雷が命中したのであろう真っ赤な炎の固まりが上がり始めた。



扶桑丸 8200 吨

3-4 遭難時の龍丸の手記

§私（龍丸）は甲板上にいて月の無い中で時計を見た時、突然左後方で、「雷跡っ！」という声と共に船長の「とり舵っ、一杯！」の音が同時に起こった。

私は時計を見た眼を扶桑丸の左舷に走らせたとき、約百米くらいの所から二本の雷跡が青白い光を真っ黒な海面に放ちつつ扶桑丸に近づいて来る。

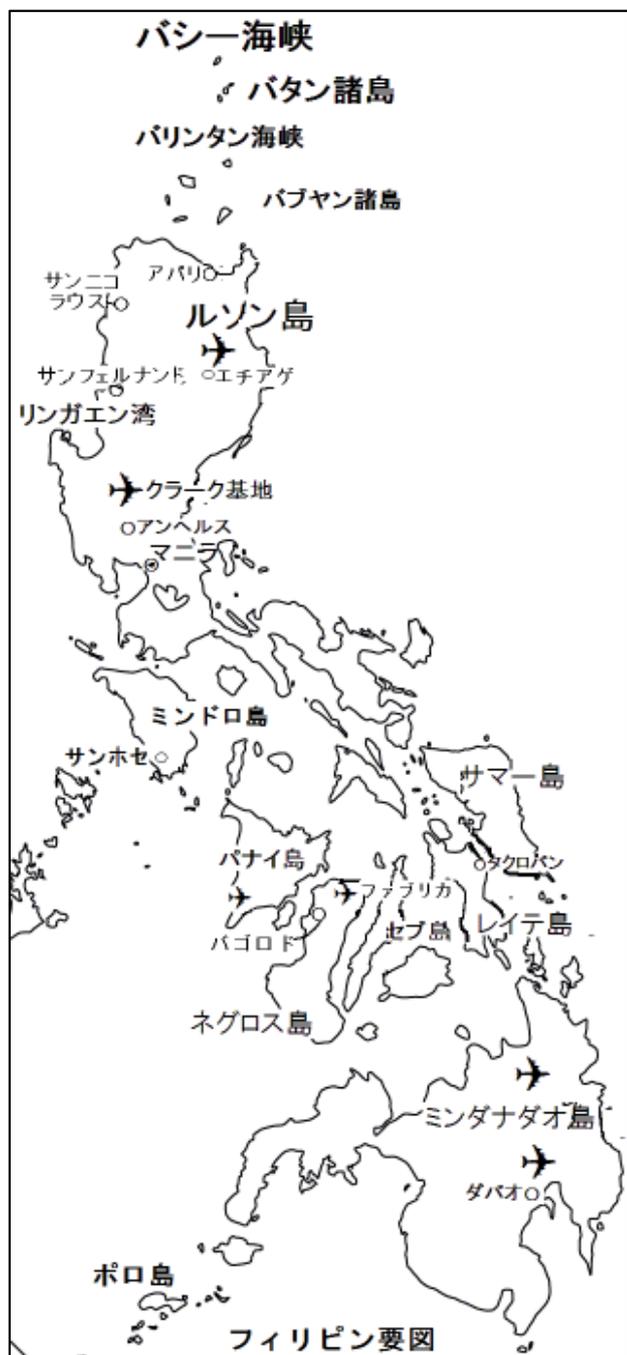
扶桑丸は精一杯左へ変針しようとして傾いているとき、この二本の雷跡の一本が船尾をかすめて何処かに行き、次の一本が扶桑丸の左舷の真ん中に命中した。丁度ドラム缶を鉄棒の光ったもので突き刺すような音が鈍く起こった。魚雷が爆発したのであろう。

扶桑丸全船体が海面に飛び上がるような震動と何もかも壊れてしまうような大きな破壊音が起こった。私は瞬間何が起こったのか判らなかったが、気がついて見たら、船橋の上のかこいの手摺りを両手でしっかり握って両足を開いて踏ん張っていたが、その両足が膝のところまで震えていた。

何秒、何分だったか、やがてその震えは止まったが、どうしたのか両手が手摺りから離れぬ。自分でもおかしく思ったが両手はしっかり手摺りを掴んでいる。親指から意識して動かしてみると、やっと一本、一本が動いて手摺りから離れた。そして、私の周囲を見廻すと私の近くにいた当番の伝令も、誰も居なくなっていた。

「伝令いっ！」と呼ぶと階段の下で「はい、ここに居ります。」と声がした。大きな声で「第

一小隊、異常は無いっ！」と問うと、小林少尉の声が「第一小隊、異常なし、ここに待機しています。」と言う。



「第二小隊、異常ないっ！」と問うと、「第二小隊、異常なし。」と声がした。「第三小隊はっ！」と聞くと「第三小隊、通路の出口に居ります。」と岩橋少尉の声がした。「第三小隊は、上甲板に出ろっ！」と命令すると「第三小隊、上甲板に出ます！」と声がした。

その時に扶桑丸は右に15度傾いていた。魚雷が命中すると、その爆発で命中した方向の反対側に先ず傾いて、それが船の復元力で命中し

た方に傾きなおし、次第に浸水して沈んでいくと聞いていたが、扶桑丸は右側に傾いたまま、中々復元しないで、右への傾きが次第に激化してゆくような気がする。

変だと思っていたら、一等航海士が階段をひょこひょここと上がって来たので、私は「とうとう、やられましたねっ。」と言葉をかけると、「やあ！運のつきです！」という。「何か私に用ですか？」と聞くと、「いや、もう、これで扶桑丸は終わりです。やられた所の緯度経度を計るためにここに来たのです。」とあって、船橋の上の羅針盤の蓋をあけてしきりに方向を測定していた。そこへ中村勘左衛門軍医が手に救命胴衣だけを持って船橋の上へ上がって来た。私は持っていた煙草を中村軍医と一等航海士にすすめ、マッチで3人の煙草に火を付けた。私は一息煙草を吸って一等航海士に「扶桑丸は何処をやられたのですか？」と聞くと、「いや、丁度石炭庫のところでしたね。それも使って空になったところですので、左舷を突き抜けて右舷に大穴があきましたよ。」「扶桑丸はどうなるのですか」というと「もう駄目です。退船させる準備をして下さい。私は船長以下を連れて救命艇で退船しますから。これで」といって船橋に帰っていった。彼が船橋に降り着いたと思われる頃、輸送指揮官の通信隊長のシャガレ声で「全員、退船」という声がしたので、私は大きな声で「全員、退船」と号令をかけた。扶桑丸の各部分から「全員、退船」と伝達する声がしたので私は改めて、更に声を上げて、「飛行第31戦隊っ！全員退船！全員靴を脱げっ！」と命令した。私も長靴を脱いだ。左舷から小林少尉の声で「隊長っ！お先に行きます。第一小隊、退船っ！」という声が闇の中に消えて行った。

そのとき既に船体は25度を越えて傾いたように思う。中村軍医の姿が何時の間に見えなくなった。

突然、上甲板の通信隊の貨車が、つなぎ止めてあったロープが切れたのか、上甲板を横転してころがり落ち始めた。右の方の海面には通信隊の兵士達が、上甲板の舷側まで浸して来た海面上を夜光虫の光を撒き散らしながら泳いでいたところに、トラックが転がって来たので、二、三人の兵士が悲鳴を上げた。

真っ暗の海面の上を無数の兵士が必死に泳いでいるが、中々船から離れない。私は船橋の上の手摺りに必死にしがみついてその兵士達に「船が沈んだら渦が起きてまきこまれるぞ

っ！出来るだけ一生懸命泳いで船から離れろっ！」と声をかけると兵士達から「よいさっ！よいさっ！」のかけ声が上がった。もう殆どというより、全員船から離れたようである。

船橋も約35度近く傾き、その端を海水で浸し始め、如何に手摺りに掴まっても立って居られなくなった。

私は思い切って両手を手摺りから離すと船橋の天井の板の上を尻ですべて海水に入ってしまった。さあ、船から少しでも離れなければならぬと思い、軍刀を背中にかけ、必死に泳ぐが、中々船から離れることは出来ない。

扶桑丸は大体35度くらい傾いたまま沈没して行ったらしい。

私は泳いでいたまでは意識があったが、突然視界が消えて暗黒の中に巻き込まれた。私の雑嚢の紐に、水筒の紐に、無数の手が差し伸べて来たような気がして、上を見たら無数の足がうごめいて夜光虫の光がその足の動きを照らしている。その白い足の裏の動きは遙か遠いものであったが、突然、見る見る私の目の前に近づいて来た。と、見た瞬間、私の体が急に飛び上がり膝の下まで海水の中から飛び出した。私は、船の沈む渦に引き込まれて、海中にひきずり込まれていたのがあった。救命胴衣をつけていたので浮力で急に海面に浮上し、その勢いで海面上に飛び上がったのであった。足の裏が見えていたのは、筏にすがっている兵士達の足であった。幸い、海水は飲んでいなかったが、海面に浮かんだとき波をかぶり、海の潮にむせびながら、31戦隊の兵士達はと、見廻すが全く知らぬ兵士達である。私は31戦隊の指揮をしなければならぬと真っ暗な海面を必死に泳いだ。31戦隊の兵士達に一人も会わなかった。

約三十分くらい泳ぎまわったであろうか？真っ黒の海面は無限に続いているので体力を消耗する。私は泳ぎ疲れてしまった。軍装は拳銃と軍刀のみで水筒も雑嚢も引きちぎれて紐も無くなっていた。軍刀は麻縄であったので海水に浸って強さを増し、しっかりと私の背にあった。近くに僅か三名の兵士がすがっている筏があったので、それに泳ぎ着き腰にあった麻縄の端を筏の周囲にあるロープに結びつけて波のゆらめくままに委せて体を休めるようにした。§

龍丸等は11時間の漂流の後、救助されたが、軍刀を背負ったままきちんと帽子のあご紐を締めて、毅然として漂流している杉山整備隊

長を見て、元気が出てきたと整備隊の部下の並木軍曹が回想している。扶桑丸の沈没によって、比島部隊の増強用資材1120屯、車輛36台、約1500名の人命が失われた。

3-5 ルソン島北部に上陸

この米潜水艦の攻撃で、船団37隻中28隻撃沈され、9隻のみ残る。（注：出発の時の数と異なるが原文のまま記載）

扶桑丸の飛行第31戦隊は、地上部隊の240人中116名と機材の大部分を喪失した。

救助された遭難者はルソン島北部西海岸のサン・ニコラウスに上陸し、飛行第31戦隊は、部落の小学校の校舎に収容された。部隊の記録や書類は一切失われ、龍丸の所持品は胸のポケットの手帳と軍刀だけであった。全員を集めて部隊の人員の点検から始めた。武器と云えば数人の下士官が持っていた拳銃と兵士が帯びていた短剣のみである。

ラオグラの警備部隊から、派遣されてきた僅かな人員の警備員により警備と上陸した部隊への給与（食事）が行われた。幸い9隻の船に十分な食料があったので当座の給与には事欠かなかった。

兵士達は若いので、一夜、陸上でぐっすり寝たら体力が回復して旺盛な食欲が出てきた。しかし、駐屯地警備部隊の達示によって部落外に出ることは禁止された。武器もなくオンボロ服の兵士達では、格好も悪く、部隊としての威厳も保てない。フィリピンの原住民への影響を考えての措置であったと考える。

3-6 機帆船でリングエン湾へ

三日目の朝、飛行第31戦隊の地上部隊は、アパリ港から巡航されて来た機帆船の船団に乗ってリングエン湾に行き、そこから車でマニラに行くことになった。

正午過ぎ、昼飯を取ってから、サン・ニコラス部落の漁船用の船着き場から機帆船に乗り込んだ。一隻に30名足らずの兵員しか乗れない。この機帆船に乗り込むのは我々航空部隊が優先されたらしく、歩兵部隊その他はどうなったのか知らない。機帆船の船長は五十がらみの漁師あがりらしく、逞しいオッサンとも云うべき男で、洗いざらしのズボンをはいていたが上半身は裸、他の3人の船員は皆、上シャツを着けているが、下は赤禪一本の連中である。

我々が乗船すると船長と機関長が挨拶に来たので、「宜しく頼みますよと」声をかけると「隊

長任せときな、俺達やこれからインドネシアまで油を運びに行くんでさあ！この船なら米軍の潜水艦なんざ、魚雷を撃っても吃水が浅いから底をくぐって当たりませんよ。あっはっ、はあー」と大口を開けて笑っていた。「何処へ行くのか？」と聞くと、「いや、何処へ行くの？どうせジャバカスマトラでしょう。日本は石油が足りないから、この船でドラム罐に石油を入れて運ぶんでさー」という。

日本の輸送船による石油の運搬は、米潜水艦の攻撃で輸送路が絶たれる状況になっていて昭和17年以来もう戦争能力が無くなりつつあったのである。

ABCD 包囲網を突破する南方進出は、南のボルネオ、ジャバ、スマトラ等の石油油井を確保すれば何とかなると思って石油を確保したものの、日本そのものの活路を見いだす対策が何も出来ていない状況で、シンガポールを陥落させた戦捷気分、英国の和平申し出を蹴ってしまったことに大きな疑問を感じる。

その結果が、この百屯前後の輸送トラック編成となった。しかもこの輸送船は内海航路用なので、無線もないし、手旗、発火信号等の連絡訓練を受けていない船員達である。

大きな海図1枚を持たされて、1隻の駆逐艦が先導して、十数隻の海上トラックがゾロゾロと付いて行く形である。

サン・ニコラスからリングエンまで約200キロ、約25時間の海路である。

有り余る時間を使って機関長から水とグリースを貰い海水で錆びた軍刀を研ぎ始めた。下士官も真似して全員で刀の手入れを始めた。さらに船長に釣り道具を借りて舷側で流し釣りをし、鯉や鮪のような魚を釣って、久しぶりに生の醤油で食べた味は格別であった。

夜は船上の甲板の上で皆鮪のように並んで、着のみ着のまま寝ても寒くない。満天の空がゆらめく船の動きで、空の方が揺れているような感じで面白い。星が手に取るように近く感じる。このようにのんびりした空を眺められるのも最後であろうと思った。

船団は米軍の潜水艦の攻撃を受けた場合、直ちに、ルソン島の海岸に向かって全速力で走り

海岸線に乗り上げる態勢で海岸に近い海をノラリ、クラリと走って行く。駆逐艦はあっちにフラリこっちにフラリと、まるで雛を守る親アヒルのように海上トラック船団の周囲を走り回り南下してゆく。そして、輸送船団はリングエン湾の北側のサン・フェルナンド町の港に接岸して、我々を上陸させた。

3-7 軽便鉄道でマニラへ

海岸近い崖の上に鉄道の駅があり、我々を乗せる列車が待機していて、船からあがってすぐそのまま、その列車に乗り込んだ。列車は日本の列車から見れば一回り小さい列車であるが、僅か数時間後にマニラに到着した。

我々はマニラ駅から兵站宿所まで市街地を無武装のまま歩いてゆかねばならぬ。遭難部隊である私の軍服は破れ、兵士達の姿も酷いものであったが、全将校、下士官は抜刀して姿勢を正し、兵站宿舎まで行軍して無事着いた。

南方軍としての被服の受領、兵器の補充、人事の報告書作成等、休養する間もなく行わねばならなかった。

しかし、マニラの街、軍司令部はまだ決戦を行う空気ではなく、進駐軍として戦勝の気分を楽しんでいるような雰囲気であった。

3-8 クラーク空軍基地に集結

遭難の地上部隊は、マニラから汽車でクラークフィールド基地に着く。その時既に、飛行第31戦隊の空中部隊はクラーク基地の北側の中滑走路に到着していた。

遭難部隊の兵士は、空中部隊に随従して来た整備隊員と共に新しい編成に入り、また、人員の補充を受けた。

8月上旬、戦闘機に追従してきた輸送機や連絡用の襲撃機を利用して整備隊の重要な下士官を先発隊としてネグロス島のファブリカ基地に送り、残りはマニラで掻き集めた器材や兵器等と共に輸送船でバコロド基地に行き、それからファブリカ基地に移動することになった。

(続く)



4 比島展開時の戦局

飛行第31戦隊に比島転進の命令が出た昭和19年5月頃の戦局は、米連合軍がニューギニア島を略制した頃である。

即ち、日本軍がシンガポールを攻略した後、ニューギニア島の南端のポートモレスビーを攻略するという米豪遮断作戦に基づいて、陸軍は昭和17年3月8日ニューギニア島東南部のラエ、サラモアに上陸し占領した。一方海軍は、短期決戦を計るため、ミッドウエイを攻略することで米軍主力艦隊を引きつけ、決戦を挑んだが昭和17年6月、主力空母4隻を失うという大敗北を喫した。このミッドウエイ海戦を契機として米軍の反攻が開始された。

先ず、17年8月米連合軍はソロモン群島のカダルカナル島に侵攻、11月には日本軍一豪州軍がニューギニア島のポートモレスビー攻略戦をしているブナ地区の攻撃開始。18年9月には連合軍はニューギニアのラエ、サラモア地区を奪還。19年に入ると米連合軍は飛び石作

戦でニューギニア島の東海岸のホーランジアに4月、ピアク島に5月上陸、ニューギニア島をほぼ制圧した。

次に米連合軍はフィリピンの南部諸島の方に来るのではないかと日本軍の予想を裏切って、6月にはマリアナ諸島のサイパン島を奇襲攻撃、日本軍は僅か1ヶ月足らずで玉砕した。

9月になると米連合軍はパラオ諸島のベリリユー島に来襲、同時にフィリピンの南部諸島への空襲を開始した。

5 決戦への準備

飛行第31戦隊の、ルソン島のクラークフィールド基地からネグロス島ファブリカ基地への転進は、昭和19年8月23日、主力の集結が完了した。

しかし、私(杉山大尉)はファブリカ基地に来てある違和感を感じた。それは、空中部隊と飛行場大隊の間がしっくりしていないことである。空中部隊と飛行場大隊とは全く異なる

指揮系統に属し、しかも、飛行場大隊長は所謂歩兵のたたき上げの頑固者で、従来、飛行隊では空中勤務者を優先して扱う風習があり、給与（食事）まで異なっていたが、飛行場大隊長はそれを一切無視し、悉く衝突していた。

その風潮が隊員にまで蔓延し、出発直前の戦闘機が滑走路に待機している時、滑走路を横切るといふ馬鹿者が居る始末。龍丸はそのような馬鹿者の教育から、飛行隊と飛行場大隊との間に入って調整するという役目まで背負うことになった。

さらに、遭難者の記録、内地への連絡や燃料、潤滑油、部品等の確保等、肝心な整備の仕事以外の雑用に忙殺されていた。

当時米軍はサイパンの攻撃なり、次いでベリリュー島に来襲、ピアク島以東の米軍後方基地は益々活発化し、大輸送船団の動きも盛んとなり、蘭領のハルマヘラ地区への進出は必死と見られた。

ハルマヘラ島、モロタイ島への上陸を予想される米艦船に対する攻撃準備のため、8月31日、セレバス島メナド基地へ市川中尉以下32名、ミンダナオ島デルモンテ基地へ遠藤少尉以下36名、レイテ島サンパブロ基地に舟木准尉以下17名を相次いで前進させた。

戦隊の保管機は長途の空輸により徹底的な整備を要するものも拘わらず、当時比島の基地には作戦資材の集積僅少であった。ファブリカ基地における燃料弾薬は僅かに2出動分、殊に潤滑油は毎日輸送機でその日その日の使用分を空輸して補給するという有様で、さらに、通信情報網の設備、飛行場設備等極めて不完全なものであった。

部隊はこの悪条件下、作戦機の整備は勿論、9月1日より、作戦機以外の飛行機を以て夜間訓練を実施し、訓練の精到を期した。又、この間、戦隊長、飛行隊長及び各中隊長は、愛機を駆ってミンダナオ島、セレバス島メナド及びハルマヘラ島の各基地を偵察し作戦準備の完璧を期した。

この間を縫って、私は、レイテ島のサンパブロ基地を、メナドに行く予定だった襲撃機に乗って食量や甘味品を持って訪問した。舟木准尉以下17名の隊員とも再会でき、日本酒を飲み交わしてお互いの健闘を祈ったが、サンパブロ基地は米軍の上陸予定地と目されているタクロバンのすぐ近くで、艦砲射撃の圏内にあり、米軍の上陸の際一気にたたかれることが分かっていたので、今生の別れになるかも知れないという

予感があった。この予感は、10月20日の米軍のレイテ島上陸により現実のものとなる。

5-1 在比日本陸軍航空隊の編成

当時、飛行第31戦隊が属していたヒリピンに展開していた日本陸軍航空隊の編成は次の通りである。

- ・南方軍総司令官 寺内寿一元帥大将
- …第十四方面軍師団長山下奉文大将
- …第四航空軍司令官富永恭次中将
- …第二飛行師団長木下勇中将
- …第十三飛行団長江山六夫中佐
- …飛行第30戦隊長佐藤真一少佐
- …飛行第31戦隊長西進少佐

山下奉文大将は敗色が濃厚となった昭和19年9月に第十四方面軍司令官として起用された（前任は黒田重徳中将）。

台湾沖航空戦での誤った戦果報告に基づいて立案されたレイテ決戦を大本営から強いられ、本来予定していたルソン島での決戦を行うことはできなかった。飛来する敵航空機が全く減らないことから、山下大将は台湾沖航空戦の戦果発表を誤報と考え、このレイテ決戦に反対していた。ところが、寺内寿一南方軍総司令官は「元帥の命令に従われないのか」とレイテ作戦を強行させた。このためレイテ決戦に多くの兵力が投入されたが、制海権と制空権を敵に握られ、第十四方面軍は苦戦を強いられた。

注1：富永第四航空軍司令官は昭和20年2月台湾に敵前逃亡で解任される。

注2：第二飛行師団長は昭和19年11月、寺田済一中将に交代。

6 第58米海軍機動部隊との前哨戦

当時、ミンダナオ島の海軍ダバオ基地にはゼロ戦100機を含めて約200機前後の海軍航空隊が展開していた。

19年9月9日午前6時ダバオ基地群の海軍航空戦隊は第58米海軍機動部隊から発進したグラマンF6Fと艦載爆撃機に奇襲されダバオ海軍基地司令部以下完全にパニック状態になった。

日本軍の予想を裏切って、ニューギニアのウエワク、ホーランジャ地区に集中している米軍の主力機動部隊とは別に米軍第58機動部隊が、日本軍の警戒体制が未だ出来ていない南太平洋を通過してミンダナオ島のダバオ海軍航空基地を奇襲攻撃したのである。

第二飛行師団司令部に海軍から米軍ダバオに上陸の情報が入り、それが誤報であったことが判明したのは午後4時過ぎであった。それが、飛行第31戦隊に伝えられたのは、最後の哨戒機編隊が帰ってきた後の午後6時過ぎであった。

9月10日哨戒機による警戒飛行を終了した夜になっても第二飛行師団司令部から何の指示もまた情報もなかった。

9月11日になっても米海軍58機動部隊の位置は不明であった。ファブリカ基地の飛行第31戦隊は割り当てられた哨戒飛行の編隊が4時間毎に、午前6時から午後6時まで飛び続けた。

この日も第二飛行師団司令部からも第四航空軍からも何の連絡も指示もないまま過ぎた。



6-1 作戦会議

9月11日の夜、飛行第31戦隊の飛行隊全員と整備隊長が集まって作戦会議を開いた。

集められた情報はデルモンテ地区の被害状況の他、特別な情報は無く、ただ、9日、10日に亘ってミンダナオ島のデルモンテ基地群、ダ

バオ基地群へ攻撃を加えた米海軍58機動部隊はその後、どこも攻撃せず、何処へ消えてしまったのか全く不明であった。これらの情報分析の結果：

(1) ハルマヘラ島、モロタイ島へ上陸を予定している米軍側で最も脅威になるものはダバオ基地の約100機の海軍の零戦戦闘隊であろう。これを壊滅させれば、近いうちに米軍は、ハルマヘラ島、モロタイ島へ上陸を敢行するであろう。

(2) しかし、ネグロス島の第二飛行師団のパゴロド基地群の主力戦闘機とセブ島の海軍零戦戦闘隊の約100機が未だ無傷で存在しているので、米海軍機動部隊はおそらく12日以降にネグロス島およびセブ島へ来襲してくるであろう。

(3) 飛行第31戦隊としては、最大の警戒態勢を維持し、米軍の攻撃があれば、全機離陸し、その離陸援護に哨戒中隊が当たり、ファブリカ基地の北方洋上で集合し、ファブリカ基地を攻撃する米軍航空隊を撃滅することを決定した。

6-2 緒戦の戦果

ところが第四航空軍司令部は、12日朝、ミンナダオ島を攻撃した米機動部隊が南東へ撤退したと判断し、比島地区の航空部隊に対して警戒戦備命令を撤回して、メナド地区への前進を命じてきた。

飛行第31戦隊はこれらの命令を無視して、12日午前6時、増永中尉の率いる2小隊8機の哨戒飛行を発進させた。

西進戦隊長、私、小出中尉の3人で飛行場の指揮所で遅い朝食をとっていた時、セブ島方向からかすかな爆音と共に飛行機群が飛んできた。双眼鏡で見ると海軍の零戦に見えた。セブの海軍航空隊がマニラ防衛に移動するのであると思っていたら、突然その2機が滑走路の反対方向から着陸の姿勢をとり突っ込んできた。着陸方向を無視した零戦の操縦者に怒鳴りつけてやろうと思っていたら、滑走中の零戦の操縦者は空を指さし何か叫んでいる。停止した飛行機から飛び降りた操縦者は「あれは敵機だ」と叫んでいる。

東の空を見ると飛行機群がセブ上空を過ぎてネグロス島の東にあるシライ山頂の方向に進んでいる。

私はすぐ指揮台に引き返し、飛行第31戦隊全機出動の合図の鐘を鳴らし、飛行場大隊に対しては対空警報のサイレンを鳴らさせ、また、指揮所の傍の対空監視所の鐘を鳴らさせた。そ

の時、西戦隊長機は指揮所の南側から滑走路を斜めにして離陸していった。

第一中隊、第二中隊、第三中隊もこれに引き続いて僅か10分足らずで全機発進、予定のごとく北方海上で集合して姿を消していった。

その頃、シライ山頂付近にかかった米軍機は3隊に分かれてマナブラ、サラビヤ、タリサイ、バコロドの方に編隊のまま突っ込み降下してゆくのが見えた。

幸いに、ファブリカ基地へ攻撃してくる様子が無かったので、私は零戦の方を見ると、一番機は滑走路の東南端付近に、二番機は南端まで走って止まっていた。三番機は二番機に並んで滑走路に向かって停止していた。

この3機はセブ201海軍航空隊の所属で、3人の話によれば「セブ島には零戦が約100機いた。午前6時、起床ラッパで起床した時、米海軍の機動部隊のグラマンF6Fの攻撃を受けた。3人は少し早く起きて哨戒任務に就くため服装が整っていたので、宿所を飛び出し、零戦に乗って基地を超低空で飛び出した。セブ島を脱出したもののセブ基地は米軍機の攻撃中で、引き返すこともできず、ネグロス島の海岸線に沿って飛んでいたらファブリカ基地が眼に入ったので、着陸方向指示も知っていたが、一刻も早く敵襲を知らせねばと思い緊急着陸しました。」とのこと。

一方、急発進していった西戦隊長以下第31戦隊機はファブリカ北方海上で態勢を整え、バコロド基地群を攻撃して帰還中の敵機を追尾し、撃墜6機、破壊11機の戦果を挙げる。

この日、米軍の来襲は午前2波、午後3波、述べ2千機に垂んとし、その都度遊撃して相当の損害を与える。

帰ってきた飛行機を点検すると被弾したものは僅か4機のみであった。未帰還機も2機あったが、その一機は芹田伍長で機関砲が爆発し発動機の吸気管が破壊されてしまったので落下傘降下して助かった。他の一機は伊藤曹長で故障のためセブ島のピリ飛行場に不時着した。

米軍のバコロド基地群への攻撃は午後4時頃まで続き、天に昇る黒煙は西陽に映えて、赤黒く輝き、物凄い様相を呈し積乱雲となっていた。

おそらく今日の米海軍機動部隊の攻撃に対して本格的攻撃を行って米軍に損害を与えたのは我が飛行第31戦隊のみであろう。

しかし、飛行隊の人々はこの緒戦の戦勝に酔う色は無かった。西戦隊長は少しの笑みもなく飛行隊全員と整備隊員に対して戦隊本部に集合

して本日の戦闘に関する研究会を行うことを申し渡した。

6-3 米軍艦載機との対戦の研究会

午後6時、戦隊本部宿舎の二階バンガローで本日の米軍機との戦闘について研究会を開いた。

(1) 隼一式戦闘機とグラマンF6Fとの性能の比較

・速度

グラマンの最大速度は隼の急降下の時の最大速度と同じ。

・上昇力

隼は1200馬力

グラマンは2000馬力、その差が上昇力の差となる。

・旋回性能 大差なし。

・装備

隼 13mm2門

グラマン 20mm2門、13mm4門

・防弾装置

隼 燃料タンクの防弾ゴム被覆

7.7mmの機銃弾には効果あり

13mm 又は 20mm の機関砲弾には効果なし。

グラマン 13mmの機関砲弾に効果あり。

排気ガスを導入する消火装置があるため火が付きにくい。

・防弾装置

隼 操縦席の背後に13mmの機関砲に耐える防護板あり。

グラマン 操縦席の背後に20mmの鉄甲弾に耐える鋼板、座席の四隅に13mmの機関砲に耐える鋼板あり。



隼一式戦Ⅱ型



グラマンF6F

(2) 米海軍の機動部隊の攻撃の特徴

- ① 日の出前は、哨戒機、機動部隊の援護戦闘機は一機も飛んでいない。電波探知機による警戒網が完備しそれを信頼しているからであろう。
- ② 電波探知機の電波警戒網の性能は、海面からの干渉により、海面から50m迄は探知不能であるらしい。
- ③ 米機動部隊の攻撃は夜間は出来るだけ陸地から離れ、海上遠くで休息し、夜半から攻撃陸地に近づいて飛行隊を発進せしめる。
- ④ 米軍戦闘機の攻撃航続距離によって、攻撃後、機動部隊は陸地から見て左右に位置を変え、敵機の攻撃を避ける行動を取る。

結論：

- ① 隼とグラマンと比較すると性能、武装、装備に於いてグラマンは圧倒的に優れているので、まともに対戦してはこれを墜撃することは極めて困難である。
- ② 隼の搭載可能な爆弾は100kgまでで、この爆弾では米機動部隊の空母に致命的な損害を与えることは不可能である。
- ③ しかし飛行甲板上の飛行機を撃破、炎上させれば燃料が流出して空母の燃料タンクを誘爆させれば空母に相当な損害を与えることは可能である。
- ④ 12日現在、敵機動部隊はレイテ島タクロバンの東94度270哩に存在し、空母8隻その他4隻の基幹艦艇よりなる機動部隊である。
- ⑤ その研究の結果、飛行第31戦隊は特別攻撃隊を編成して、明13日払暁「超低空攻撃」によりこの機動部隊を急襲する。超低空攻撃とは海面すれすれに飛行し、敵艦の直前で急上昇して空母甲板に爆弾を投下後、離脱する攻撃方法で、飛行第31戦隊は隼に機種改編をする前は九九式襲撃機隊で、地上から50m以下の高さで攻撃する専門の部隊であったので「超低空攻撃」は得意とするところであった。

6-4 特別攻撃隊の結成

西戦隊長は「我が飛行第31戦隊で必勝を期

しうる方法は、明払暁機動部隊に対して超低空攻撃を行うほか無しと考える。このために明払暁、この私が先頭に立って米海軍機動部隊に対して、特別攻撃隊をつくり攻撃しようと思う。このため飛行隊より志願者を募り特別攻撃隊を編成する。これは命令ではないが、志願者は一歩前に出て呉れ。」という声と共に、飛行隊員全員が一歩前進した。

西戦隊長の命令で私は全機（おそらく二十数機）の整備を行うよう部下に命じた。

その後、西戦隊長は、第二飛行師団司令部、第十三飛行団長と連絡を取り、「カン作戦」が立案された。この内容は

12日薄暮	第30戦隊	2機
12日夜間	第17戦隊	1機
13日払暁	第19戦隊	3機
	第31戦隊	2機

全機出撃のはずがなぜ2機になったか、その経緯を追求する立場にない私は大きな憤りの気持ちを抑えることは出来なかった。

9月12日の午後11時近く西戦隊長から、小佐井武士中尉、山下軍曹の2機の「カン作戦」特別攻撃隊出撃の準備命令を受けた。

6-5 特別攻撃隊の出撃

9月13日、タクロバン沖に敵空母8隻その他基幹4隻の機動部隊を発見する。

敵空母撃滅のため特別攻撃隊を組織する。31戦隊は全員志願するも上層部の判断で2機のみ払暁攻撃に参加させる。この作戦を「カン作戦」と命名する。

当日の早朝、4時から全戦隊の出撃機の調整と始動が始まった。午前4時30分、ファブリカ街の方で一つの電灯が灯され何かの動きが始まった。小佐井中尉等が起床し、朝食を取り始めたのであろう。

一台の自動車がファブリカの街から飛行場の坂を登って指揮所に近づいて来た。西戦隊長と小佐井中尉、山下曹長の3人であった。私は全機出撃の準備が整ったことを報告、戦隊長は米機動部隊の位置の推定、攻撃要領等を指示した。3人は椰子油灯で打ち合わせをして戦隊長に敬礼して分かれた。

午前5時20分、小佐井機は始動開始、次いで山下機が始動を始めた。小佐井機の両翼下に黒々とした百kg爆弾が懸吊されているのが無気味であった。

山下機が誘導路を離陸出発点に向かっているのを見定めると、小佐井機は轟然と発動機の回

転数を上げて離陸していった。両翼の赤、青の翼端灯と尾部の白灯が滑走路を走り車輪を見事に翼の下に畳み込み空中に上昇したとき山下機が轟然と出発して行った。両機は飛行場上空を左旋回して我々の頭上を飛び抜けて東方の暗闇の中に消えていった。

小佐井機と山下機が空中に赤青の翼端灯を彗星のようにきらめかして上昇していった時、南方のシライ山頂上を1機の東方に向かう飛行機が見えた。何処の戦隊の飛行機か判らないが満天の星がきらめく中に青と赤の灯がゆっくりと東へと消えていった。

岡野大尉以下第一中隊の全機の第一回の哨戒警備飛行の出発を見送ってから私は指揮所に戻り朝食を食べ始めた。

食事が終わり茜色の東方の空を眺めていると、小佐井中尉の機付長と機付兵の二人が、車輪止めを持ったまま二人並んで立ち尽くして東方の空を見つめたままである。

機付長の兵は東の空を見つめたまま両眼に一杯の涙を溜めていた。「おい、どうしたのか」と私が尋ねると、彼は慌てて涙を拭いて「隊長！小佐井中尉殿は帰ってきますよね、必ず帰ってきますよね、隊長！」と尋ねたので、「小佐井中尉は必ず帰ってくる。そのような命令になっている。一体どうしたのか」と聴くと、「小佐井中尉殿は、出発の時私を呼んでこう申されました。『今日は特攻をしてくるからな。長い間お世話になったな。有り難う！では行ってくるぞ！』と申されました。」とつぶやいて何時までも立ちすくんでいた。(続く)

7 ファブリカ基地米機に急襲される

昭和19年9月13日、岡野大尉機の哨戒飛行を見送った直後、突然指揮所の背後の対空無線の壕から飛行場大隊の兵が上半身を出して私に「杉山大尉殿、岡野大尉殿から無線電話です」と言う声がした。すぐさま壕に飛び込み受話器を取ると「岡野編隊報告、セブ東方海上5000、米軍機約200機西進中、岡野編隊はこの敵機に一撃をかけてから戦隊の集合地に向かい合流する。終わり。」と言って無線電話は切れた。

私は受話器を置いて壕から飛び出すと、小佐井中尉機の機付兵が「隊長、敵機」と叫んでいる。私は指揮所の上に駆け上がり出動の鐘を鳴らした。

シライ山の尾根を越えて約50機のグラマン

が超低空で進入するのが見えた。横一列に真っ黒な翼を並べたグラマンが一斉射撃を開始したので真っ赤な火が連なって見えた。グラマンは望楼すれすれに飛び去りファブリカ街上空で反転して、第二波の編隊が銃撃を終了して追尾してくるのを確かめてから第二撃の攻撃に急降下してくる。

次いで、シライ山方向から高度約4000mで飛来してきた艦爆編隊群が三方に分かれて、その一隊がファブリカ飛行場に突っ込んで来るのが見えた。

この時、第二中隊の繋留地から中沢大尉機が滑走路に飛び出して斜めに走りファブリカ北方の空に消えていった。続いて第三中隊の繋留地から増永大尉機が誘導路から速度の遅いまま滑走路に出ないで飛び上がりフラフラしながらシライ山麓に向けて飛んでいった。更に、第二、第三中隊機が何機かが、反転したグラマンの第二回の銃撃の中を、飛び立っていった。

しかし、第二中隊の石川軍曹機がその銃撃の中を擦り抜けて滑走し離陸した瞬間、グラマンが未だ速度の遅い石川機に急降下して銃撃してきた。石川機は一瞬にして火に包まれたが、つんのめるように石川機を追い越していったグラマンに追尾して一斉射撃を行い、グラマンが火を発したと見ると見事な加藤ターンで大地に激突して炎上した。

その時、背後から西戦隊長の声がした。「おい杉山、俺の飛行機は敵の第一撃で風防が飛んで出撃できない。他の飛行機を出せ。」と叫んでいる。

その時、ファブリカ街上空から艦爆の第二波が急降下して突っ込んで来るのが見えた。「隊長殿危ない」と対空無線の兵2名が戦隊長を壕内に引きずり込んだ。その直後、戦隊長が走って来たところに爆弾が2発続けて爆発した。

その直後、第二中隊繋留地の一番奥にあった高橋中尉機が猛然と誘導路を滑走路に向け走ってゆくのが見えた。ところが誘導路の南から飛行場大隊のトラックが指揮所の方に走ってきた。あ、危ないと叫び間もなく、そのトラックの直前に艦爆機からの爆弾が破裂し、トラックが停止した所に高橋中尉機が突っ込んでしまった。

トラックの兵は高橋中尉を助け出そうとしたが、そこにグラマン2機が高橋機に銃撃をかけてきた。高橋中尉はその銃弾に胸を撃たれ病院に収容された。

飛行機のいなくなった飛行場に対する米軍の

艦爆による攻撃は建物に向けられた。指揮所の周りも爆弾が落ち、壕への逃げ場が無くなった我々は指揮所から20m先に落ちた爆弾の弾痕の中に飛び込んで、艦爆が急降下してくる方の斜面に身を伏せていた。小出中尉、加藤曹長も一緒に伏せていた。米軍艦爆の爆撃は一、二発、指揮所より滑走路の方に落ちて大きな地煙りの柱を立てた。三番機からは100kg爆弾と思われるものを三発落として急上昇していった。その中の一発が私の方に近づいて来る。落下する場合少しでも長めに見えるものは他へ外れてるのであるが、この爆弾は真っ黒の真円に見える。

「小出、加藤、いよいよ来たぞう」と声を掛けて弾痕の斜面に伏したが、そのまま私の記憶は吹っ切れるように無くなってしまった。何分経ったか判らない、真っ暗闇の中で私はもがいていた。爆弾が落ちた所から10mも離れていなかったで、全身に土をかぶっていた。小出中尉も加藤曹長も地面に伏せたまま気を失っていた。二人の肩をたたくと二人とも気がついて起き上がった。

これから30分後に第二波が来るはずである。遊撃の態勢を作らねばならぬと、決心して準備に取りかかった。

離陸していった飛行機はおそらく全滅であろう。小佐井、山下機の帰還時刻はとうに過ぎている。岡野編隊もどうなったか判らぬ。

対空無線の壕から西戦隊長が飛び出してきて飛行機を用意せよ、誰か生きていられるかもしれない、飛んで見てくると、きかない。戦隊長機を点検すると前面の風防ガラスに穴が空いているだけで、始動装置を回転させると始動できたので、西戦隊長は急いで乗り込み離陸していった。



ネグロス島 レイテ島

7-1 米機動部隊との戦闘の結末

米機動部隊空軍のファブリカ基地に対する襲

撃は9月13日の6時30分から8時30分の僅か2時間足らずであったが飛行第31戦隊の被害は甚大であった。

戦死者は岡野和氏第一中隊長、中澤比佐雄第二中隊長(54期)、増永三七男第三中隊長(54期)およびカン作戦の2名を含めて12名で、飛行第31戦隊の操縦者の将校は、西戦隊長、寺田中尉の僅か2名となった。

飛行隊の下士官も木塚准尉以下最もベテランの部下を失うこととなった。

幸い整備員には負傷者も戦死者もなく皆元気であった。

午後10時頃第二飛行師団司令部から遊撃を停止する命令が出て、戦隊は残った飛行機の遮蔽と分散に務める事になった。

その指揮をしていると伝令が来て高橋中尉が私に会いたがっているとの事であるので、飛行場大隊の医務室に行った。軍医に何処をやられたのですかと聞くと、「左胸部貫通機関砲傷です。もう、助かりません」と首を振った。「高橋、俺だ、杉山だ!」という高橋中尉は眠っていた眼を開けて私を見た。彼の顔はもう薄青く、死相が出ていた。

「杉山さん、私を飛行機の上に連れて行ってください。機上で死にます。天皇陛下万歳。杉山大尉殿後を頼みます。長い間お世話になりました。畜生英米野郎! P51メ 戦隊長に宜しく」といって深い昏睡状態に入った。私は整備日誌に急いでなぐり書きのメモをしていると飛行場の方で銃撃の音が始まった。米機動部隊の第二波の攻撃が始まったらしい。

飛行場にとって返し対空無線のある壕に飛び込むと、対空無線は米軍艦爆の指揮官らしい声で全機に対して攻撃の指示を与えているらしく、第一回攻撃が終了して上昇してきたものを高度2000位にまとめて、対空砲火も迎撃もないので、各部隊に攻撃の指示、ジョン、アタック、ライト。ポブ、アタック、レフトと、与えているのが手に取るように聞こえた。畜生と思ったが、対空射撃の武器を持たない戦隊では手の施しようもない。

全飛行場がすさまじい土煙に包まれて行った。攻撃した米機は各々東の空に飛び去り、上空を援護していた戦闘機群も約3000mの上空を東の空へ消えていった。

私が各中隊を一巡して戦隊の指揮所に帰って来た時に米機動部隊の第三波が来た。私は直ちに空襲の鐘を鳴らし全員を待避せしめていると、米軍の戦闘機群が飛行場に突入してきた。

しかし、地上から何等の反撃もなく、地上の飛行機は分散遮蔽を十分にしていたので、一応飛行場各地区を射撃したのみで艦爆機の攻撃はなくて、バコロド方向へと移動していった。マナブラ、サラビア、タリサイ、バコロド各基地は相当の損害が出たらしく、黒煙は空を覆って、頂上の方は積乱雲になっていた。

米軍の攻撃終了後、各中隊を巡り破損した飛行機の修理を命じた。高橋機については発動機の交換を必要とするので、独立整備隊まで自動車で運ぶ手配をした。

その他遮蔽されていた飛行機には殆ど損傷が無かったので、まだ、戦隊として出動可能であった。

7-2 クラーク基地へ撤退直後戦力0

昭和19年9月14日、飛行第31戦隊はルソン島のクラークフィールド基地へ西戦隊長以下11機の飛行隊のみ移動していった。

その翌日15日、米軍はハルマヘラ、メナド基地を攻撃して、遂にハルマヘラ島のすぐ北にあるモロタイ島に上陸した。

私は9月17日、クラーク基地の飛行第31戦隊の飛行隊に追従すべき命令を受け、23日頃、襲撃機に乗って、クラーク基地群のアンヘルス北飛行場に到着してみると、飛行第31戦隊の飛行機は1機も見えない。十数機が滑走路に二列に並んだまま焼けて残骸を曝していた。私は、その焼け跡に立って呆然として身動きもできなかった。

やっと飛行場大隊本部を探し当て、飛行第31戦隊の居場所を聞き、尋ねてみるとアンヘルス町の北の郊外の森の中に竹とニッパ椰子の葉で編んだ掘っ立て小屋の中に、西戦隊長と寺田中尉が居た。

事情を聞いてみると9月20日、21日の米海軍機動隊の攻撃により、第二飛行師団の各戦隊のみならず、飛行第31戦隊の飛行機は全滅状態となり、飛行機は旧式の隼が2機のみ残り、それも中破の状態では修理が必要であった。

しかし、この飛行場には整備用の工具、器具は全くなく、整備員も全く居ないので、飛行場大隊長に交渉してトラック1台をかり、搭乗する飛行機もない下士官の操縦者を集めてクラーク基地の本部に乗り込んだ。しかし、本部には誰もいない。師団長以下山を3つ越えた盆地に逃げていったらしい。



コレヒドール要塞の海軍高角砲

そして、9月26日、おんぼろの隼2機とクラーク基地で盗んできた2機を現地習熟飛行と称して4機編隊で基地上空に飛ばすことに成功した。

その日、待ちに待った市川中尉以下飛行第31戦隊の整備員の精鋭がメナドからクラーク基地に前進してきた。

その翌日、第二飛行師団の参謀等が来て、第二飛行師団の再建問題を協議した結果、飛行第30戦隊も出動可能機0なので、飛行第31戦隊の2機を譲れということになり、この盗んできた2機は公式の飛行第30戦隊の補給機となった。

他の戦隊に飛行機を譲った代わりに、補充した飛行機、破損した飛行機を貰うことにした。それも一機、一機と正に僅かずつの補充である。

9月末、日本内地に飛行機を補充しに行った戦隊長や飛行隊の人々が新型の隼に搭乗してアンヘルス北飛行場に帰ってきた。

その結果、おんぼろも混じっているとはいえ、16機の編隊が轟音を響かせてクラーク飛行場の上空でデモンストレーションを行うことができた。

10月5日、飛行第31戦隊はアンヘルスより海軍のマバラカット飛行場（クラークフィールド基地の一部で東飛行場と西飛行場の2つの飛行場がある）に移転、敵空襲下に訓練をなしつつ、一部遊撃、哨戒任務に服す。

飛行場には隼戦闘機の残骸が多数残されていた。その内2～3機破損の程度の少ないのを見つけた。工具は修理廠に置き去りにされたものを失敬してかき集め、トラックに積んでアンヘルス北飛行場に引き上げ、西戦隊長に報告した。それから、操縦者をつれてクラーク基地に行き、

故障の程度の少ない2機をアンヘルス北飛行場に空輸した。

一方、私はマニラまでトラックで出張し、マニラの航空廠に対し必要な機材器具の補給を交渉した。第四航空軍司令部の後方参謀部はどうせ爆撃されれば吹き飛んでしまうから何でも好きなものを持って行ってくれと好意的にに応じてくれた。私は、第31戦隊分だけでなく第30戦隊の分も貰い受けアンヘルス北飛行場に9月25日に帰ってきた。

その時のマニラの状況は、マニラ湾には駆逐艦、輸送船等約30隻停泊していたが、グラマンや艦爆ヘルダイバーが高度6000米の上空から3000米近い雲を通過して急降下爆撃をしていた。地上では海岸近くの高射砲陣地と各艦船から高射砲と機関砲で迎撃していた。西に傾いた太陽の光に映える白雲の蔭から一列になって降下する急降下艦爆群に向かって高射砲弾が炸裂する。高射砲弾が網の目のように空中を飛び交うのは絵のような光景であった。米軍の艦爆の尾部に炸裂した高射砲弾が当たり、胴体をとんぼ返りしながら墜落するのを目の当たりにした。



7-3 戦場掃除

隊を編成、私が引率して出発。シライ山の密林の中を進んでフィリピン人の部落に自動車運転手と兵2名を残し、何処で米比軍に出会うか判らないので、全員銃に着剣させ弾丸を込めて進んでいった。

三つ目の谷を越えた砂糖黍畑の茂みがなぎ倒されていて、その先に灰白色の飛行機の垂直尾翼が見えた。座席には搭乗員の姿はないが微かに燐光が燃えていた。屍臭が辺り一面に臭う。シャベルで灰をかき分けると中から焼死した死体が、既に腐敗していて誰とも区別が付かなか

った。片手の手首だけをスコップの刃で切断し、残りの死体は土の中に埋めた。フィリピン人の部落に行き部落長から水を貰い切断した手首を洗い、石の上に置いて薪を載せガソリンをかけて焼却し、残った骨を紙に包んで持ち帰った。

戦争は膨大な資源と資材を使い、暴力の限りを尽くして、破壊を行う行為である。いずれかが勝つか、負けるかする。愚かと云ってこれくらい愚かなものはない。しかし、人間の運命はその愚かさの中にある。戦場掃除という仕事は、その愚かさの果ての始末をする仕事といえよう。

8 台湾沖航空戦

マリアナ諸島の占領に成功した米軍は次の目標をフィリピンと定め、最初の上陸地点をレイテ島に向けていた。このレイテ上陸作戦に先立って周辺空域の制空権を確保するため、米軍空母機動部隊は昭和19年10月10日沖縄本島への空襲を行った。次いで11日にフィリピン、12日に台湾への空襲を行った。

日本軍は陸海共同して約1200機の飛行機を動員して12日から15日にかけて、空母17隻、戦艦6隻を基幹とする米機動部隊に対して連続的に攻撃を繰り返していた。

この時の大本営発表(16日付け)では、空母13(19)隻、戦艦3(4)隻を含む35(45)隻を撃沈撃破したというもので、新聞各紙はその大勝利を報じた(註:括弧内は19日付けの発表)。

ところが、実際は重巡2隻大破、空母1隻小破というもので、この過大戦果は各攻撃機の報告を重複計算した結果で、日本軍の索敵能力、情報収集能力の低さを示すものである。

一方、日本空軍は300機以上の損害を出した。これは初日の戦果を信じて軍司令部提案の夜間攻撃(T攻撃)を中止し、昼間攻撃に切り替えた艦隊司令部の判断ミスによるところが多い。

マバラカッタに駐留していた航空第31戦隊は台湾沖で交戦した後フィリピンに向け南下してくる米機動部隊に対する攻撃の命令を受け、10月15日以後、一部は米機動部隊上空制空、一部は帰還飛行機援護の任務に就き、グラマン2機撃墜する。

朝日新聞

空母十三、戦艦三など 撃沈破卅五隻に達す 潰走の敵引續き追撃中

【面海方東聯合】

我が軍は連日中の敵機動部隊を引續き追撃中にして現在迄不明せ
る敵軍艦隻の分を含む五五の如し
轟撃沈 航空母艦 一〇隻 撃破 航空母艦 二隻
戦艦 二隻 巡洋艦 四隻
巡洋艦 一隻 駆逐艦 一隻
艦種不詳 一隻

空母四を撃沈破 別動機動部隊捕捉

【面海方東聯合】

敵機動部隊の一団は敗走中の味方部隊隊の爲別動して、十月十五
日午前高「マ」を先頭せり
同方面の我軍空母部隊の敵を激撃、同島東方海面に於て多数の空
母を撃沈した。戦艦若しくは巡洋艦以上
航空母艦 一隻 撃破 航空母艦 三隻以上
本報聞に於て我方若干の未確認機あり

逃げ惑ふ敵艦群 完全に潰滅

敵艦の全回を撃滅す
敵艦隊は連日中我が軍の追撃を受け、完全に潰滅した。逃げ惑ふ敵艦群は、我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。逃げ惑ふ敵艦群は、我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。

洋上遙か出撃

決戦こゝに開始 兜の緒を締め増産へ

【談相首漢小】



今日の戦況に於ては、我が軍の決戦の準備が完了した。敵軍は我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。逃げ惑ふ敵艦群は、我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。

社説 この機に乗ぜよ

この機に乗ぜよ。我が軍の決戦の準備が完了した。敵軍は我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。逃げ惑ふ敵艦群は、我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。

わが国は、この戦況に於ては、完全に勝利した。敵軍は我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。逃げ惑ふ敵艦群は、我が軍の猛烈な攻撃を受け、完全に潰滅した。

昭和19年10月17日の朝日新聞の台湾沖航空戦の戦果記事

昭和19年10月19日の大本営発表は「我が部隊は10月12日以降連日連夜台湾及びビルソン東方海面の敵機動部隊を猛攻し、其の過半の兵力を壊滅して之を潰走せしめた。
(一) 我が方の収めたる戦果総合次の如し、・轟撃沈 航空母艦 11隻、戦艦 2隻、巡洋艦 3隻、巡洋艦 (もしくは) は駆逐艦 1隻、・撃破 航空母艦 8隻、戦艦 2隻、巡洋艦 4隻、巡洋艦若しくは駆逐艦 1隻、船種不詳 13隻、撃墜 112機、
(二) 我が方の損害 飛行機未帰還 312機」。
一方、米側では、10月16日、第3艦隊司令長官ウィリアム ハルゼーは太平洋艦隊司令長官チェスター ニミッツに「ラジオ東京が撃沈と報じた第3艦隊の全艦艇はいまや海底から蘇って、目下、敵方へ向けて退却中」という電文を発信したといわれている。このような情報を入手しうる機能を持つ軍部またはマスコミは当時日本には存在していなかったのかと残念に思う。

9 捷一号命令

10月16日、レイテ島東方のスルアン島、ホモンホン島に米上陸部隊の先遣隊の船団が近づき上陸を開始したという情報が入った。スルアン島には電波警戒部隊と守備隊が居たが、この連絡を最後に消息を絶ってしまった。
昭和19年10月19日捷一号命令(比島敵上陸作戦に対する攻撃命令)が発令された。
その直後の20日、米軍はレイテ島東部のタクロバンに上陸した。
米軍はタクロバン基地、ドラック、ブラウエ

ン等日本軍の航空基地を占領し、米軍の急速な建設機械化部隊により僅か3日で航空機の発進ができるようにしていた。モロタイ島、ハルマヘラ島からは米陸軍のP38ロッキードが飛来してきた。第四航空軍第二飛行師団の各戦隊はネグロス島の各飛行基地からレイテ島の友軍の援助のため必死の攻撃を続行していた。

9-1 レイテ沖海戦

捷一号作戦に基づいて海軍はレイテ沖に出撃、10月23日~25日、レイテ沖において、空母4隻、戦艦9隻を擁する日本の主力艦艇と

空母17、護衛空母18、戦艦12を擁する連合軍の主力艦艇との決戦が行われた。結果は、日本海軍は空母4隻、武蔵を含む戦艦3隻等を失い、レイテ湾に突入する予定であった栗田艦隊が反転して逃げて帰るといふ決定的敗北を喫した。

9-2 第1次レイテ総攻撃戦

10月19日、57期の内藤研吾少尉等が新型の三型の隼戦闘機に搭乗してクラーク基地のマバラカット飛行場に到着した。これで、出動可能機14機となった。

10月24日、西戦隊長は、捷一号作戦に参加を命ぜられ、翌25日、30戦隊の5名を併せて18機を率いてマバラカット飛行場を出発してファブリカ基地に転進した。26日から28日の間、第30戦闘集団の指揮下に入り、レイテ敵上陸地点制空および艦船攻撃に従事し多大の成果を上げる。

しかし、私が、10月30日サラビア基地の偵察機に便乗してファブリカ基地に着いてみると、飛行第31戦隊の飛行機は全て現地にある戦隊に引き渡し、西戦隊長以下操縦者はバコロド基地に行って全員クラーク基地に引き返したとのことであった。

9-3 サラビア基地（明野飛行団）

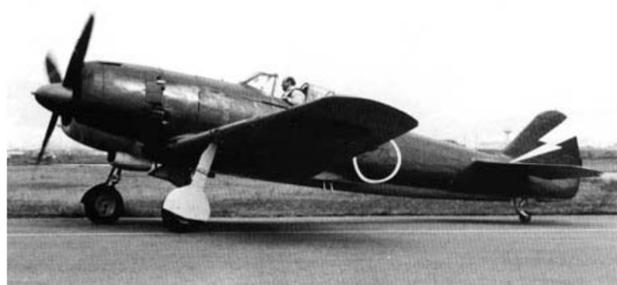
私は、再び載って来た偵察機で、サラビア基地に立ち寄った。サラビア基地はシライ山麓の西側にあり、明野飛行集団の新藤飛行団長が率いる新鋭機の四式戦キ84（疾風）が展開していた。キ84は1800馬力、20mm機関砲2基、13mm機関砲2基を持った大東亜決戦号と銘打った戦闘機である。

バコロドで西戦隊長にお会いした後、サラビア基地の新藤飛行団長を訪問した。丁度その時、モロタイ米軍基地からコンソリデーテッドB24の編隊が十数機サラビア基地の爆撃に進入してきた。急遽、離陸したキ84戦闘機4機がB24の編隊を遊撃するため急上昇して攻撃をかけると、一機は海へ一機はシライ山の方へ墜落し、残りの内2~3機も火を吹き始め編隊は四散して海上の方へ逃げていった。キ84は全機無事帰還した。

祝杯を挙げている間に、突然、P38が16機シライ山の方から飛来して、離陸態勢にあった滑走路の一番機に襲いかかった。あっと言う間なく一番機は火を噴き、2番機も1番機が邪魔になって飛べないまま銃撃されてしまった。



コンソリデーテッドB24



四式戦疾風キ84



ロッキードP38

P38は迎撃してくる戦闘機がないのを見定めると、地上にあったキ84を一機ずつ銃撃し、約20機あったキ84の内14機が損害を受けた。これは、富永第四航空軍司令官の視察中、新藤飛行団長と私の目の前で起こった悲劇であった。

9-4 戦力再々編成

11月に入って第31戦隊はクラークフィールド基地群のマバラカット飛行場に帰り戦力回復を計ることとなった。

飛行第31戦隊は他の戦隊に飛行機を融通し

ていたので、優先的に11月10日から15日の間に、新補充機を比島で4機、内地で3機、アンヘルズで6機を受領、11月20日には総数25機に増加していた。内出動可能機は20機である。また、戦隊には既に陸士57期の新鋭将校、内藤、清水、門馬の各少尉が着任しており、補充機も隼の三型であったので、マバラカット飛行場には新鋭の気が満ち溢れていた。

9-5 二式戦鍾馗の出撃

マバラカット基地の周辺にも各機種の戦隊がいてグラマン F6F に腕に覚えのあるパイロット達が挑戦し、空中戦を演じていた。しかし、性能に優れた防弾装置が完備し、武装も3倍近い火力がある F6F に対しては到底太刀打ちできるものではなかった。

ある日、防空戦闘機用に作られた二式戦鍾馗（キ44）群がクラークフィールド周辺に進出してきたグラマン F6F に空中戦を挑み、上空5000米から低空50米に亘る大空中戦を行ったが、F6F の性能には及ばなかった。グラマン F6F に追尾された二式戦が、全速で低空に逃げたが逃げ切れずマバラカット東北の大地に激突して炎上するのを目の前で見た。

飛行第31戦隊はこの様な戦闘には加わらず、専ら飛行機の整備に集中した。マバラカット基地にも米軍の空襲があったが、それは海軍機に対してであって不思議にも我が戦隊の飛行機には損害は無かった。

10 第2次レイテ総攻撃戦

レイテ島における我が軍の主力、垣(16D)、抜(2D)の2個師団と所在航空兵力は、敵のタクロバン上陸後は、ブラウエン等の航空基地を放棄し、タクロバンおよびブラウエンの西方山地に拠り、約4個師団に余る敵軍と対峙していたが、10月下旬にはカリガリ湾地区への敵の進入を許す結果となった。

11月中旬、レイテ湾には150隻に余る敵大小艦艇船舶常在し、敵航空戦力も170機に達する。更にモロタイ島から飛来する B24 等の大型爆撃機による昼夜を分かたぬ爆撃により、飛行場は一瞬にして数百の池と化し使用不可能となる。加えて、約2週間毎に来襲する低気圧は敵船団のレイテ進入の格好の隠れ蓑となり、時には物凄き雷雨の厚い幕を張って友軍機の侵攻を妨げた。

しかれども、各種悪条件を克服して「レイテ総攻撃」は続行され、我が方は、一式戦、二式

戦、三式戦、四式戦、ゼロ戦、紫電、雷電、銀河等あらゆる機種を総動員して攻撃するや、敵も、ロッキード P38、リパブリックランサ P37、グラマン F6F、F4U コルセア、ノースアメリカン P51 ムスタング、サンダーボルト P47 等全機種を繰り出して、両軍必死の攻防戦を展開していた。

10-1 レイテ総攻撃戦に参加

11月22日、飛行第31戦隊に第二飛行師団司令部よりファブリカ基地に前進してレイテ総攻撃戦に参加する命令が下った。

23日、第十三飛行団長江山中佐と西戦隊長は戦隊機20機、特別攻撃隊の10機、計30機を率いて、マバラカット飛行場を出発、ファブリカ基地に向かう。

そして、私は、江山飛行団長の要請によって、第十三飛行団の隼戦闘隊全部の整備隊（正式名：隼集成戦闘機隊整備隊）の副隊長になった。

日本の飛行機の点火栓はゴムで絶縁していたので悪天候の時はゴムの亀裂から雨水が浸入し故障の原因となっていたので、積乱雲がある悪天候では飛べなかった。一方米軍の飛行機はプラスチックで被覆してあるので漏電による故障は発生しにくく、悪天候でも飛行できた。

当時のレイテ島は台風の季節であったので、米軍は日本機が飛べない悪天候を利用して幾次にも大船団を送り込み、着々その態勢を固めていた。

一方、日本軍は第六次の輸送船団で最精鋭の玉兵団、第一師団の砲兵部隊等をオルモックに送り込もうとしていた。

私がファブリカ基地に到着したのは確か11月25日である。しかし、陸士57期の新鋭花井少尉、清水中尉はいずれもパナイ島、タクロバン上空でそれぞれ散華していた。

11月28日、隼集成戦闘機隊はこれらの船団の擁護を命じられた。ファブリカ基地の隼集成戦闘機隊は飛行第31戦隊20機、飛行第54戦隊8機、飛行第24戦隊5機、計33機であった。

しかし、連日の過酷な出撃により、第六次輸送船団は無事オルモック港に上陸できたが、第31戦隊の出撃可能機は20機から僅か3機になってしまった。

ファブリカ基地の西北地区には20mm機関砲陣地があったが、それ以外の地区には対空火器が一つもないので、私は部下に命じて破損した隼戦闘機の13mm機関砲を全部取り外し、改造

して地上の対空火器に仕上げ基地の守りを固めた。

10-2 特攻隊志願

第2次レイテ総攻撃戦に参加のため出発する11月23日の前日、マバラカットの街にあった宿舎において、壮行会が開かれた。西戦隊長が「明日、ファブリカ基地に前進して、レイテ総攻撃に参加し、全力を尽くして戦勝への道を開きたい。残置隊のものも一日も早く戦隊に参加できるよう訓練に励んでくれ。」と挨拶すると、末席にいた特別見習士官5名が一斉に西戦隊長の前に進み出て深く敬礼をして、先頭の特別操縦見習士官出の杉田繁見少尉が「隊長殿！お願いがあります。特攻でも何でもやります。我々も一緒に連れて行ってください」といって、文書を差し出した。西戦隊長はそれを一読すると「うっ！」と言ったまま俯いてしまった。私は、背後からその文書を見ると「特別攻撃隊志願書」と血潮で書かれていた。私は見かねて「飛行機は全て天皇の大御心の贈であり、日本の全国民が全力を挙げ、寝食を忘れてこの前線に送ってきたものである。整備隊も敵の空襲下身命を賭して飛行機を整備してきた。特別攻撃は余程の熟練が無い限り米軍の集中砲火、敵戦闘機の攻撃をかいくぐって敵艦に体当たりすることは出来ない。選抜の決定は戦隊長がその点を考慮して決定したものである。もう一度よく考えてくれ。」と説得すると、皆眼球をむき出すようにして、涙をこらえながら悲痛な声で「戦隊長殿分かりました。」と納得してくれた。

彼らは、8月末に配属され、飛行時間僅か100時間余でやっと、単独離着陸が出来るようになったばかりであった。(続)

11 第3次レイテ総攻撃戦

11-1 高千穂空挺隊

昭和19年11月30日、ファブリカ基地で対空火器を設置していると、突然、輸送機(AT)が2機着陸してきた。これは、高千穂空挺隊が作戦打ち合わせのために隼集成戦闘機隊を訪れたのだ。しかも、操縦席から降りてきたのは何と陸士で同中隊同区隊の奥園大尉であった。高千穂空挺隊の輸送機全部十数機がこのファブリカ基地に着陸するということであった。私は奥園に、「ここは戦闘機の飛行場で、大型の輸送機を隠すところがない。」と言うと、奥園は「出撃は払暁か夜半である。夕方ここに

着いて、払暁出撃するので心配はない。貴様が整備してくれるなら何よりだ。宜しく頼む。」といわれ、飛行大隊の幹部を呼んで整備上の打ち合わせをして万全を期した。

11-2 高千穂空挺隊の出撃

12月6日午後5時30分、高千穂空挺隊の一部、奥園大尉の率いる輸送機がファブリカに到着した。

飛行第31戦隊は、この空挺隊を掩護して、ルソン島の基地から、ファブリカへの空路を掩護し、また着陸におけるファブリカ上空の掩護を行った。

空輸機は、滑走路の東側に、ズラリと並んで、出発準備にかかり、空挺隊員は、その空輸機から降りて、地上で休憩していた。

飛行場大隊からの夜間離陸の誘導灯と、離陸目標灯、緊急着陸設備が準備され、ブラウエン、ドラッグには、夜半に降下することになっていた。

私は奥園大尉と共に、空輸機の整備を指導して、地上に休憩している空挺隊員の状況を見た。空挺隊員は、鉄兜の代わりに、空挺隊員の特殊な、航空帽を被り、顔を黒く塗っていて、体には携行する弾薬、手榴弾、機関銃といったものを、びっしりつけていて、大変な重武装なのに驚いた。落下傘は前後に二つつけている筈であるが、背中の一つのみであったように思う。重量と人体の幅で、空輸機に最大限の人員を搭載するための配慮であらうか。

暗くなった、ファブリカ基地に、愈々緊張が張りつめて行った。全員武装は解かないまま、草原に横になって、夫々機関銃を抱えて、仮眠している。

私が近づいてゆくと、一人の軍曹が眼をあけて、起きようとするので、私は止めて彼の傍にしゃがみ込み、「大丈夫か？」と問うと、「大丈夫です。今、何時ですか？」と問うので、「午後6時30分だ」と答えると、ニッコリ笑って「有難う御座いました。」と云って又眼を閉じた。

私は、全機を一巡して、指揮所に帰って見ると、奥園大尉達も、夕食を摂っていた。

飛行第31戦隊は、空挺隊の輸送機の出発する前に、戦場のブラウエン、ドラッグ基地の制空のために出発し、空挺隊は、午後11時頃、全機、次々に出発して行った。

幸い、この日の天候は非常に良く、空の星が、すぐ手に届くように、澄み切って居た。そ

の星の光の中に、一機、一機、輸送機は消え、私の戦隊の編隊も、消えて行った。

レイテの日本軍の前線は、この空挺隊の降下と共に行動を起こして、ブラウエン、ドラック飛行場に進出し、飛行第31戦隊のブラウエン基地に派遣していた舟本准尉以下はオルモックより、ブラウエンに行くことになっていた。

午後2時近く、輸送機を掩護する編隊が帰って来た。

その報告によると、「輸送機の編隊は、セブ上空を経て、オルモック湾に入り、進路を南にとって、レイテ島の南部を廻って、ブラウエン基地地域へ海岸の方から進入し始め、降下して行った。

上空から状況を見ると、中には、強行着陸した輸送機もあったようである。

ブラウエン基地の中に銃火を交える火線が火花のように一斉に見え始めていたが、やがて、15分もすると、静かになり、暗黒になってしまったので、多分、高千穂空挺隊の奇襲は成功したのではないかと思はれる。」とのことであった。

その報告が終わるころ、一機の輸送機が、夜間であったが、緊急着陸して来た。着陸後、機体を点検すると、余程低空で飛んだのか、主翼に樹の枝をひっかけて、外板に喰い込ませていた。これは、ブラウエン基地上空で、海岸側より進入して、空挺隊を降下せしめ、レイテ島の背梁山脈を越えようとするとき、高度を誤って、森林の梢をかすめて、飛んだときのものであるという。

7日、偵察機によりブラウエン、ドラック両飛行場を偵察した結果、両飛行場には敵機の存在無く、対空射撃もない状態であった。

しかし、後で判ったことであるが、ブラウエン西方山脈にあった第16師団は空挺隊の降下に併せて攻撃前進する予定であったが、山地の東方に上陸した米軍の砲兵隊の一斉射撃により一歩も前進できなかった。空挺隊は7日、8日と基地を死守していたが、米軍の大量な戦車群を先頭にした攻撃に持ちこたえられず西方の第16師団の山地の方に後退せざるを得なかったとのことである。

11-3 日本軍救援部隊の援護

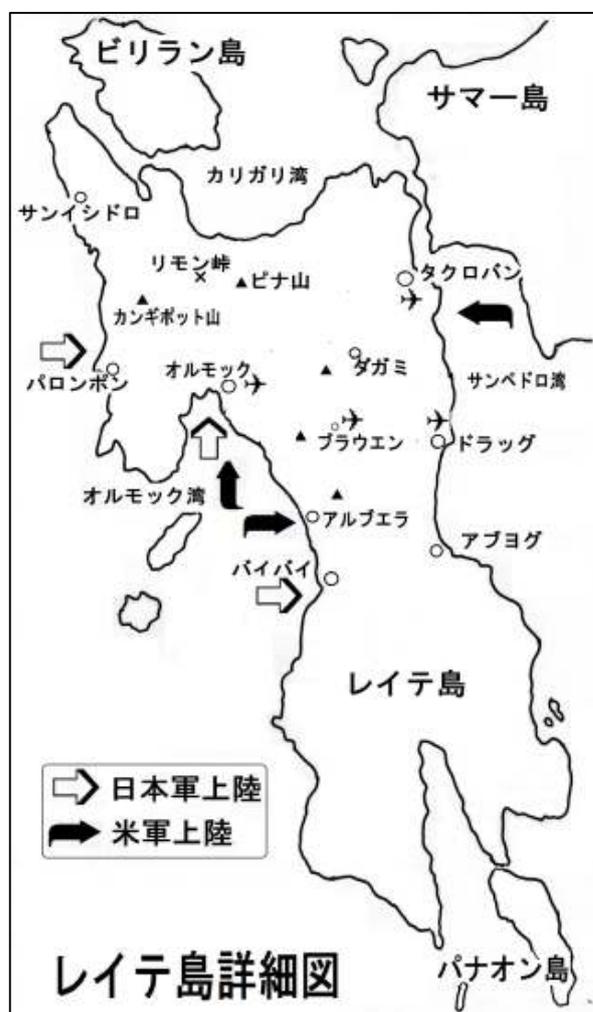
一方、日本軍は泉兵団（第26師団）の増援部隊をオルモックに上陸させるため船団輸送が行われていた。

しかし、オルモック方面の日本軍に対して、

タクロバンに進出した米軍長距離砲の砲撃が行われてきたので、上陸地点を南方のバイバイに変更し、12月2日兵員及び器材の陸揚げに成功する。

この船団輸送を擁護するため、ファブリカ基地の隼集成戦闘機隊（出動可能機18機）は船団擁護のため連日出撃していた。

飛行第31戦隊として痛恨なことは、12月6日、この船団擁護の任務に就いていた柏木少尉が未帰還になったことである。柏木少尉の戦死で第31戦隊に配属されてきた陸士57期の将校は全員戦死し、戦隊飛行隊の将校は寺田中尉一人になってしまった。



11-4 米海兵隊オルモックに強行上陸

12月7日バイバイ上空で P38 数機と交戦した第31戦隊の成沢機が遅れて帰還した。成沢機は、アルブエラ附近を米軍輸送船団が北上中、さらに、米海軍がオルモック港を攻撃中というレイテ作戦に重大な転機をもたらす状況を報告した。万一、米軍がオルモック港に上陸

すれば、レイテの主力部隊玉兵団、泉兵団の背後を攻撃されることになり、日本軍の戦線が全面的に瓦解することになる。

第31戦隊飛行隊の指揮官である寺田中尉は直ちに全機をもって米船団に特攻を仕掛けるべきであると進言した。しかし、第二飛行師団司令部の判断では、米軍の上陸には2～6時間かかるので、その上陸時間を見計らって第二飛行師団の全力で攻撃すべしとの命令を下した。

飛行第二師団は、その日の午後3時全機シライ山上空に集合し、アルプエラ方向に出撃した。

所が、米軍はその時既にアルプエラよりもオルモックに近い地点に上陸していた。その上陸兵力は約一ヶ大隊であるがアリゲータという水陸両用戦車が主体で、全部の上陸に僅か1時間もかからず、このアリゲータはトーチカ陣地を形成する形で強固な橋頭堡を確保していた。

第二飛行師団の戦爆連合編隊が、この米軍上陸地点の上空に達した時には、米国の船団は上陸を済ませ、アルプエラより遙か南方をタクロバン基地に帰還する途中であった。飛行第二師団司令部の判断は全くの誤算であった。

この米軍のオルモック上陸によって、レイテの日本軍の敗色が濃厚になった。この様な時期の12月8日、隼集成戦隊の集成整備隊長であった第54戦隊整備隊長の蔵前大尉が日本内地に転勤したので、杉山飛行第31戦隊整備隊長が隼集成整備隊長に就任した。

飛行第31戦隊はフブリカ飛行場の西南地域、第54戦隊は東北地域、第24戦隊は東南地域にそれぞれ展開していたので、私は監督のためにフブリカ基地全体を歩き回らなければならなくなった。フブリカ基地の西北地域には、20mm機関砲陣地があったが、他の地区には防空火器が一つもない状態なので、壊れた隼戦闘機の13mm機関砲を取り外しそれを改造して地上の対空火器にすることにした。

12月8日のフブリカ基地の隼集成戦闘隊の状況は総数34機、出撃可能機18機と減小していた。しかし、オルモックに上陸している米軍の後続を断つためにカスピ海の米軍輸送船および上陸部隊を連日攻撃することになった。

12月9日、日本軍はオルモックへの補給路を変えて北方のパロンボン港附近に泉兵団の後続部隊を上陸させ玉兵団、泉兵団への補強を行うことに成功した。

このようにオルモックの攻防戦が日米両軍の戦闘の山になってきた。そのために日本軍の地上軍はもとより飛行隊は必死の攻撃を行ってき

た。しかし、海軍の零戦部隊は殆ど壊滅状態になり、陸軍も第二飛行師団のみがかろうじて活躍できる状態であった。

11-5 レイテ島日本陸軍苦戦

当時のレイテ島では、オルモックの米軍上陸部隊は一個師団以上に増大し、泉兵団、玉兵団は、次第に背後のカンギポット山の方へ戦線を圧縮されてきた。

日本軍の補給路も日本海軍の壊滅により台湾ールソン島の補給路が遮断され、ネグロス島、ルソン島への補給は途絶えてきた。



中央の奇妙な形の山がカンギポット山

これに反して米軍のタクロバン基地には長距離戦闘機P38、P51ムスタング、長距離爆撃機B27等が進出してきた。これらの飛行機はニューギニア、ハルマヘラ、モロタイ島を経て、レイテ島に輸送されてきている。

12 米軍ミンドロ島を急襲

12月10日、米軍の空母6～7隻を含む335隻の船団がネグロス島に向け航行中という情報が第二飛行師団から隼集成戦闘機隊に届けられた時、さすが剛胆な江山中佐も何も言わずその文書を私に渡した。傍にいた西飛行戦隊長はそれを見て真っ青な顔になった。

この時、第二飛行師団の出動可能数は私の計算では僅か50機位である。

しかも米軍の輸送船団は、全船艇が対空砲火を装備し、それを一斉射撃するときは、少なくとも高度5km以下では全く進入できない程の弾幕を形成するものである。その大船団がボホール島の南の海域をゆっくり6ノットの速度で進み、ネグロス島に近づいて来るように見えた。

12月12日、ネグロス島にある全特攻機を

もって米船団を攻撃することになった。しかし、第二飛行師団の出撃可能機は僅か27機であった。

この第一次特攻掩護のため、第13飛行戦隊長、中野和彦少佐を長とする8機が、隼集成戦闘機隊より、出撃して行ったが、残念ながら、中野少佐以下3機が、未帰還となってしまった。

12-1 極限状態のファブリカ基地

12月13日、連日の戦闘により、第31戦隊の出撃可能機1機のみとなった。

整備隊は11月末以来他部隊と共に隼集成整備隊を編成し、述べ十個戦隊の数百機にのぼる整備にあたってきたが、連日の徹夜の整備と給与（食事）の劣化により脚気、夜盲症、栄養失調にかかる隊員が増加し、平均体重も40kgに減少していた。

さらに、我が部隊の唯一の生き残り操縦将校であった寺田慶一中尉を9月12日のルソン島出撃で失い、中堅の操縦者岩原軍曹以下3名をカガヤン沖の空戦で失い、西戦隊長が一人ぼつねんと居るだけになってしまった。

飛行第13戦隊は戦隊長中野少佐の戦死で解体に等しい状態になり、他の基地に引き上げていった。我々はこれらの戦隊が残っていた故障した飛行機を貰い受けることで辛うじて隼集成戦闘機隊の姿を維持してきた。

12-2 米軍ミンドロ島に上陸

ネグロス島に上陸を予想されていた米輸送船団は、ネグロス島を通り越して、12月15日、ミンドロ島サンホセを急襲、日本の守備隊は僅かに一ヶ中隊であったので、何の抵抗を受けることなく米軍陸上部隊は上陸した。米軍の上陸部隊は直ちに飛行場を建設したので、これでファブリカにある各航空基地はルソン島との唯一の後方補給地を失うことになった。

このような状況のある日、私は第十三飛行団長江山中佐に呼び出された。江山中佐は沈痛な顔をして「貴様は米国ではネバタ砂漠で新型爆弾の開発に成功したと云うが本当か、新型爆弾とはどんな爆弾かと」下問された。

私達、陸軍の航空技術のものは、日本でも仁科博士の居る理研で核爆弾の研究が進められていることは知っていたので、それは原子爆弾の事でしょうと答えた。

「その爆弾がファブリカ基地に落とされたらとうなるのだ」と続けて訊ねられたので、「このファブリカ基地に落とすようなことは無いで

しょうが、若しも落とされたらファブリカ基地どころでなく、このネグロス島の半分は吹っ飛んでしまうでしょう」と答えた。

12-3 特攻機の飛来

極限状態でも、飛行機の分解、遮蔽、組み立てを行っていたファブリカ基地に12月18日の昼頃、突然、特攻機が10機飛んできた。バコロドより富永第四航空軍司令官が参謀を連れてやってきた。特攻隊の隊員と昼食を取り作戦命令を受けることになっていたらしい。富永司令官は特攻隊の出撃に際し、必ず一升瓶を携えて来て隊員と会食を常としていたが、それしか能がないと酷評する者も居た。

私は特攻隊の隊長に飛行場の飛行機を分散するように申し入れたが、すぐ飛ぶのでその必要は無いとそのままにしていた。

その時、突然シライ山の方からP38が7機、音がしないようにエンジンを止めて、急降下してきた。特攻隊の1番機の燃料タンクが撃ち抜かれて燃料が漏れ始めた。

基地にあった20mm機関砲陣地が一斉に射撃を開始するとP38の1機が煙を噴きながら東北の方へ消えていった。

私は火を噴く飛行機の傍に駆け寄ると軍司令官以下が指揮台の上に立って呆然と私の方を見ている。私は大声で「爆発するぞ！全員待避しろ」と叫ぶと、軍司令官以下が待避壕の中に隠れた。

私は急いで飛行機に吊り下げられている100kg爆弾の信管を取り外し、爆弾を落下させた。すぐに部下と共に1番機の傍にあった5機10個の爆弾を取り外した時、1番機の燃料タンクに火が入り爆発した。

15分ほどして1番機は完全に燃え尽きたので、他の飛行機を点検したら、若干の被弾はあったが、当基地で修理可能な程度であった。

その後、特攻隊はどのようにして出撃していたか私の記憶には全く残っていない。しかし、私は第二航空師団長から賞詞を貰うことになった。（続く）

1 3 現地自活と地上戦の訓練開始

12月15日米軍はミンドロ島に上陸したので、近いうちにネグロス島にも上陸してくることを覚悟しなければならない。しかし、米軍は1機でも日本軍の飛行機が飛んでいる時は上陸してこない。それまでには未だ時間があると思った。その間に航空部隊は、地上戦闘の訓練と地上生活の訓練を行わねばならぬ。また、飛行機の機数が減ったので、飛行機の機長と必要整備員のみ勤務させ、他は自活のための訓練を行うことにした。

(1) 既に夜盲症、脚気、栄養失調に罹っている者に対しては、休養室を設置し特別治療に当たらせた。

(2) 薬草、食用草の知識を学習させた。(3) 現地住民にマラリアがはやっていたので、第31戦隊付きの軍医と衛生兵で医療班を編成し、現地住民の診療を行わせた。

(4) 背嚢は潜水艦攻撃で殆どの者が持っていなかったもので、木材で背負子を作り、重量物を運ぶ櫓と兼用させた。

(5) 武器としては山刀を鍛冶の経験者に作らせた。山刀はジャングルを踏破する場合必須のものである。

(6) 爆弾の火薬を抜いて手榴弾を作らせた。

(7) 手榴弾および炊事用火種の着火用の火縄は椰子の繊維で作り機関砲の薬莖を利用して火が保存できるようにした。

(8) 非常用食料

①塩を焼き固めて携帯食塩を作り常にポケットに携帯させた。

②乾燥野菜、焼き米、乾パンを作らせた。

(9) 山岳やジャングル内の移動に必要な携帯綱、連絡ロープを常に携帯させた。このような準備をすることで地上戦での覚悟と生存能力を高めるようにした。

1 4 コンソリデ-テッドB24の来襲

12月15日ミンドロ島へ米軍が上陸し、18日ファブリカ基地の隼集成戦闘機隊として最後の特攻隊の出撃の擁護をした後、19日には終日、残存機の分散を徹底的に行うことになり、偽装と、暗夜でも滑走路に出ることが出来るように誘導路の整備とを行った。

20日は、久しぶりの休養日として兵士達を休ませた。私は分散した飛行機を見回るために滑走路の方へ足を向けた時、突然、4発の重爆コンソリデ-テッドB24が6機ずつ編隊を組んで4編隊、5000mの高度でシライ山頂の

方からこちらに飛んでくるのが目撃された。B24の編隊は飛行場の上空に入ってきたが爆弾を投下せず上空を通過していった。変だなど思っているとファブリカ街の上空でゆっくり旋回して高度を下げてきた。地上からの対空砲火もなく、迎撃する戦闘機もないのを確かめてから飛行場の上空に進入し、爆弾投下を始めた。

私は防空壕の中に飛び込み、両手で眼、鼻、口を塞いで爆弾の投下を待った。滑走路の南側から爆弾が次々に爆発して近づいてくる。爆弾の震動で大地に伏せた体が地面から跳ね上げられて失神したようになった。

爆弾の破裂音が遠のいて手足を見ると確かについている。壕から這い出し、外を見ると壕の僅か5m離れたところまで弾痕が続いていた。

B24は帰途についたかを見ると、旋回して第31戦隊の兵舎の方へ爆弾投下を始めた。さらに、周辺の地区へ反復爆撃を継続した。

このジュウタン爆撃で、飛行場大隊本部のコンクリートの建物は半分吹き飛んでいた。第31戦隊の兵舎は椰子の葉で作ったニッパハウスであるので大した被害を受けず隊員も殆ど無事であった。

しかし、川口曹長の姿が見えないので探しに行くと、彼の担当の飛行機が直撃弾を受けて大破し、その傍に、爆弾の破片を無数に受けて倒れていた。川口曹長は防空壕の中にいたが自分の飛行機が心配だと制止を聞かず飛び出して行ったとのこと。他の飛行機は無事であった。

飛行場の滑走路は完全に破壊されていたが、ラワン工場のブルドーザーや牽引車があったので、滑走路の修復は一夜でできあがった。

その夜、第2飛行師団から明朝タクロバン地区の各飛行場に対する攻撃命令が下った。私は直ちに第31戦隊の整備隊に連絡すると共に、飛行第54戦隊の整備隊に伝令を送ったが、整備隊には誰も居ないとのことであった。飛行第54戦隊本部および同飛行隊にも連絡したが、誰も整備隊の行方は知らないと言う。

翌朝、第31戦隊の整備隊は整備運転を始めたが、第54戦隊の整備員は一人も出てこないので、他の戦隊の整備を行うことは禁止事項であるが、止むを得ず第31戦隊の整備員を派遣して試運転を行わせた。しかし、7時過ぎになっても第54戦隊の整備員は出てこなかったので、この出勤は不可能になった。

早速、隼集成戦闘隊としての原因究明の会議が開かれた。

飛行第54戦隊長は、整備の指揮は整備隊長

である私の責任であると主張するが、第54戦隊の整備隊がB24の爆撃を受けても、その安否すら確認せず、宿舎が破壊されて何処に移動したかも知らなかったし、その移動先を通報する義務さえ感じていなかったという、第54戦隊長の無責任な発言に、江山第13飛行団長も呆気にとられ怒る気にもなれず、この審議が打ち切られた。

私の長い軍隊生活で、出撃命令が出ていて出撃できなかったのはこの一回だけである。

15 B24の直撃爆撃を受ける

12月23日、飛行隊の出撃のない日なので、西戦隊長と気晴らしにファブリカ町の西方の椰子林で昼食を取るようになった。ところが、椰子林に入った時、B24が12機編隊でシライ山の方向からファブリカ町の方に近づいて来るのに気がついた。私が飛行場の方へ引き返して行くと伝令兵が駆けつけて、遠藤少尉他数名がB24の爆撃で地下壕に入ったまま生き埋めになったと伝えた。整備隊の全員を集めて、壕を掘り返すと遠藤少尉以下6名のばらばらの死体が出てきた。

敵は20日の爆撃で滑走路を破壊したが、我々がすぐ復旧してしまうので、今日は250トンの爆弾を使用して滑走路や施設を徹底的に破壊する目的で攻撃してきた模様である。



ネグロス島 レイテ島

16 ノースアメリカンB25の来襲

ファブリカ基地は12月20、23日の爆撃で滑走路は完全に破壊されたが、ブルドーザーによる復旧活動により一応使用出来る状態に復活した。飛行機も隔離により河口機以外は損傷が少なかったが、連日の出動により、出動可能機 5機、軽故障 1機、大故障 4機となった。

12月28日、完全に復旧したファブリカ基地で昼食を取っていたとき、ノースアメリカンB25が十数機シライ山の裾野の方から超低空で飛行場に進入してきた。私は「空襲、全員配置に付け」と号令し、隼戦闘機の機関砲を改造して作った機関砲陣地の射撃を指示した。

敵の一番機が私のいる指揮所の方に真直に向かってきて一斉に爆弾を投下した。その直後グーンという大音響と共に大きな土煙があがった。私は、断崖の斜面をお尻で滑って断崖の底のバナナ林の中で土に半分埋もれていたらしい。

やっと土から抜け出して断崖を這い上がっていると、部下達が「隊長がいない」と大騒ぎしていた。上に上がってみると指揮所の所に大きな弾痕があり、木造の指揮所は木っ端みじんに壊れていた。



ノースアメリカンB25

B25は1機撃墜されていた。斜面に激突してぐしゃぐしゃになっていた。搭乗員は5~6人だが全く区別が付かないほど損傷していた。しかし、飛行服も飛行帽も被ぶらず、ピクニックに行くような服装をしていたのには驚いた。

ファブリカ基地の独立対空機関砲隊は表彰されることになった。機関砲隊だけの撃墜数は180機近くあり、第31戦隊の撃墜数の175機を上回っていた。

なお、第31戦隊の保有機は、出動可能機 7機、要軽修理 1機、要大修理 6機、合計 14機である。

17 飛行第31戦隊の編成替え

12月の末に隼集成部隊の残置隊(地上部隊)は各基地に於いて第四飛行師団の指揮下に入るべしという命令が出た。

12月30日の第二飛行師団司令部からの連

絡により、飛行第31戦隊のマバラカットにある整備隊は、私の手を離れて、50名は比島軍司令部のあるバギオにおいて司令部の航空関係の直轄部隊となり、残り100名はアパリ渓谷のエチアゲ飛行場基地要員となる事が分かった。

しかし、私が心配したのは比島防衛司令官である山下奉文大将と第四航空軍司令官富永恭次中将との間の意見の分裂である。

山下大将はマニラ市を放棄し、予想上陸地点のリングエンに対して東側の山地に拠って長期の抵抗戦を行うことを主張し、一方、富永中將はマニラを死守するという考えであった。山下大将は日本空軍の力に対して全く信頼感を失っていた。航空部隊の第一線の将兵も富永軍司令官には失望していた。

我々は、昭和20年の正月をファブリカ基地で迎えた。第十三飛行団長江山六夫中佐以下ファブリカの全部隊の将校が飛行師団司令部の宿舎に集まって正月の宴を開いた。集った将校は既に敗戦を覚悟していたのか誰一人戦況について語るものはいなかった。

18 幻の隼戦闘機隊

このように連日爆撃に晒されていたファブリカ基地では、密林に隠した飛行機を密かに整備していた。そして、新年会の翌日の1月2日、ファブリカ飛行場から剣持曹長以下4機一ヶ小隊で全機夕弾を両翼に吊ってレイテ島のタクロバン基地に向け出撃していった。この出撃は大成功で全機無事帰還した。

飛行場大隊の対空無線でタクロバン放送を傍受したら、早朝の急襲によってタクロバン基地は大混乱になったようである。米軍基地の放送に拠れば「本日、突然、幻の隼戦闘機[Phantom Japanese fighters, flying lily,(隼のことを米軍は下から見ると百合に似ているのでこの様に呼んでいる)]が4機やってきて攻撃し、基地は大損害を受けた。この戦闘機編隊はおそらく台湾から長距離やってきたものと思われる」この放送を聞いた我々は大笑いした。

なお、夕弾とはドイツの成形炸薬弾に関する技術供与によって陸軍が開発した空対空・空対地親子爆弾(クラスター爆弾)の秘匿名称である。

19 米軍護送船団リングエン湾に迫る

レイテ島では米軍の大艦隊、大船団が集結し始めて、いよいよルソン島への上陸作戦の開始

が近づいていた。飛行師団司令部からは司令部偵察機が出撃してこのレイテ島周辺の米軍の動きを偵察していた。

昭和20年1月2日から3日にかけて、米軍上陸部隊の船団が動き始めた。

船団は、空母15隻、補助空母4隻、戦艦25隻、巡洋艦18隻、駆逐艦40隻、輸送船328隻、上陸用舟艇100隻よりなり、その総数は、艦艇約130隻、船舶428隻である。

これらの船団がレイテ島、ネグロス島、パナイ島、南シナ海、ミンドロ島、ルソン島へと延々と繋がって動いている。

第1次の敵船団がリングエン湾に到着したのは1月7日である。彼等は直ちに上陸を開始せずリングエン湾の沖に停泊して8日、9日と過ごした。その間、海上機動部隊による爆撃が反復された。マバラカット基地の飛行第31戦隊の残置隊にもかなりの犠牲者が出た。



20 米軍リングエン湾に上陸開始

米軍の主力は猛烈な艦砲射撃の支援を受けてリングエン湾の海岸線に1月9日19時20分上陸を開始した。

全く戦力を失った第四航空軍の各基地に駄目押しと思われる執拗な攻撃が行われた。米海軍も戦艦、巡洋艦の隊列をリングエン湾沖に、駆逐艦を沿岸近く進めて日本軍陣地に猛烈な艦砲射撃を集中してきた。

日本軍は米軍の上陸に際しての攻撃方法を知っていたので、主陣地は上陸地帯の両側の山岳地帯に設置し、正面は仮設的な陣地を置いていたので大した損害は無かったものとする。

リングエン湾に上陸した米軍はリングエン市とその東方のサンアラビタン町に橋頭堡を作り、その主力はマンガダレンに進出してきた。

21 戦隊最後の特攻隊 精華隊出撃

1月11日の朝、第二飛行師団から参謀が来て特攻隊の志願者を募集したところ、飛行第31戦隊のクラーク基地に残存していた杉田少尉以下5名の特別操縦将校（彼等は去る11月19日ファブリカ基地に進出する際、血書の特攻隊志願を提出した者達である）及び数名の下士官が直ちに志願した。これは、第31戦隊の殆ど全員と云うべき人員である。

その中に、11月の台湾沖の空戦に参加したが故障のためルソン島のリパ海軍飛行場に不時着した伊藤准尉がいた。伊藤准尉はリパ飛行場で発動機の故障を修理して貰ったが陸海軍の部品の仕様が異なり、修理が遅れ、1月11日の朝、マバラカット飛行場に復帰したばかりであった。

伊藤准尉が戦隊長に特攻志願の申告をし、許可を得て、リパ飛行場から苦心して持って帰った愛機の所へ行くと、田中伍長が乗って、出発線に居るではないか。伊藤准尉は慌てて「こら、田中、それは俺の飛行機だ、俺に返せ」と叫んでいる間に、杉田少尉以下の6機の特攻機は轟然と大地を滑走して出発してしまった。それに続いて田中伍長は風防を開いて片手で伊藤准尉に手を振りながら上昇していったとのことである。

当日、ファブリカ基地にいた私は、西戦隊長から「飛行第31戦隊、マバラカット残置隊の乃村少尉以下6名、本朝、リングエン湾の米上陸軍に、特別攻撃を行う、空母大爆発2、輸送船炎上3、空母撃沈1、炎上」のメモを受け取り、これを整備日記に書きながら戦隊本部の戦死者の慰霊室に入り、祭壇の前に座り込み、長い間特攻隊員の冥福を祈り続けたことを今でも記憶している。（注：精華隊の出撃日、戦果は戦史とは多少食い違っているが杉山氏の手記の

通り記述した。）

飛行第31戦隊の特別操縦将校5名、下士官2名を含む精華特攻隊は総員33名で昭和22年5月8日、南方軍総司令官寺内寿一より感状を授与されている。

この感状によれば、昭和19年12月17日より昭和20年1月13日に亘る特別攻撃により、轟沈空母1隻、巡洋艦2隻、輸送船8隻、爆破炎上空母1隻、輸送船12隻となっている。

マバラカット基地の残置隊はこの特攻機の出撃によって殆ど残存機もなくなり、整備隊の市川中尉以下一部はバギオに一部はエチアゲ基地に転進していった。（続く）

22 続幻の隼戦闘機隊

レイテ島のマバラカット基地から、昭和20年1月11日、最後の特攻隊精華隊が出撃していった。

その頃、レイテ島の日本軍はレイテ島西側の山脈カンギポット山に星兵団、東南山麓に抜兵団、西南山麓に玉兵団が布陣し、最終的な抵抗を試みていた。

ファブリカ基地の保有飛行機は出動可能機5機、要軽修理2機、要大修理5機の計12機であった。ネグロス島の第二飛行師団は全く孤立した状態で、しかも、辛うじて航空部隊としての機能を維持していた。

保有機も殆どの飛行機がレイテ戦以来使用してきたガタガタの飛行機を修理し、オーバーホールしての飛行機である。

これらの飛行機を飛行場から人力で運搬して椰子林の中に隠し、早朝、夕弾を両翼に吊って滑走路に引き出し、タクロバン基地群への攻撃を続行していた。

この攻撃は二三日おきか数日置きに実施し、多大の戦果を挙げた。

米軍は必死になってこの幻の戦闘機隊の所在を確かめようと努力しているようであった。

毎日、昼夜を分かたずファブリカ基地の上空に、コルセアF4U、ロッキードP38、コンソリデーテッドB24の偵察機が飛んできた。この間隙の6時前後を狙ってレイテの各基地を攻撃し続けた。

我々は、払暁攻撃して帰って来た飛行機は着陸すると、直ちに、飛行場からジャングル内の修理場所に隠匿して、滑走路は、土を盛って弾痕があるようにしていたので、8時頃米軍の哨

戒機や偵察機が来ても、判らぬようにして、攻撃を続行していた。

23 ルソン島の情勢

1月23日時点で、リングエン湾に上陸した米上陸部隊はマニラ近郊に達し、マニラ防衛軍との最後の決戦の日が近づいてきた。しかし、日本軍の主力の第十四方面軍は、山下大将以下バギオの防衛陣地に移り、マニラには海軍の陸戦隊と僅かの陸軍防衛隊が残っているのみで、その陥落は時間の問題であった。

マニラが陥落すると米軍の比島解放という大目的が達成され、日本軍はバギオを中心とする第十四方面軍、ネグロス島の第二飛行師団、レイテのカングボット山の陣地の残存部隊等は、残敵という地位に下落してしまう。

このような情勢で特に不可解なのは第四航空軍司令部の動向であった。最初の作戦会議では山下方面軍司令官がマニラ防衛を断念してバギオに防衛陣地を設ける案を提出したのに、富永第四航空軍司令官はマニラ死守を主張した。

ところが、米軍がマニラに迫ると見るとアッサリと司令部をルソン島奥地のエチアゲ基地に移してしまった。

このような無責任な第四航空軍司令部の下での作戦や統率に従うことは出来ないで、第二飛行師団司令部は独自の判断に基づいて行動を取ることにした。

そして、11月23日のネグロス島の第二飛行師団傘下の各部隊長会議を開き、各部隊は米軍の上陸に備えて、地上戦闘に入る態勢を作ることとなった。また、この会議において、隼集成整備隊を解散して元の第十三飛行団と飛行第31戦隊に戻るようになった。

しかし、第十三飛行団の傘下であるマナブラの飛行第30戦隊はレイテ作戦に参加せず、現在は台湾に居るらしいが消息不明である。従って残っているのは我々飛行第31戦隊のみということになる。

24 現地自活生活の訓練

ルソン島におけるマニラ攻撃の時期が迫るにつれて、ネグロス島の米比軍の残党と思われるゲリラの活動が活発になり、ファブリカ基地の東部およびシライ山の山中に出発し始めた。

我々はこれらの米比軍をESAPEと称していたが、その中に米陸軍の中佐の階級の人が出て、ネグロス島の南東山岳地帯に潜んでいるといわれていた。米軍はこれらの人々に武器や短波無

線機を投下して組織化を図っていた。

それと我々を悩ませたのは日本軍の軍票が全く価値を失ってしまったことである。煙草1個が約2000円になった。



フィリピンの日本軍軍票 (100 ペソ)

(The Japanese Government の表示あり)

過酷な労働と食料の悪さから兵士達の体力が落ち、下痢がはやりだした。ファブリカ町には東洋一と云われる砂糖工場があった。その砂糖工場の野積みの砂糖袋の山が米軍の爆撃で火がつき一週間以上も燃え続けた。それに着目して、燃えた砂糖の山を掘り返すと内部は活性炭になっていた。これを下痢止めとして兵士達に吞ませた。

また、現地の人は椰子の花柄から作った椰子酒を呑んでいる。この椰子酒には成長ホルモンが含まれているので、これを休養室の病人に吞ませてみたら1週間で回復し、体重も増加してきた。そこで、整備隊の全員に朝夕この椰子酒を飲ませることにした。

ファブリカ町には、日本軍が来るまではシライ山の山地産物とヒモガン河口の海産物との物々交換の市場が開かれていた。飛行場大隊長はスパイ活動を心配して極端に現地住民との接触を嫌っていたが、私は市場を開いて、山手、海手から来る住民に通行証を発行して通過させたら、妙なもので、住民は大変喜んで、その通行証のチェックの場所に市場に売るものの一部を置いて行くようになった。また、これも住民からの情報で、病人が出た場合、整備隊付軍医を中心にして医療班を作り治療に当たらせた。現地の住民は非常に喜んで、いろいろの食料をお礼に持ってきた。兵士達も現地住民との接触で現地慣れや現地での生活の方法を知るようになった。

これらの現地自活と米軍上陸に備えての訓練、陣地の構築の間に、間歇的であるが幻の飛行機隊によるタクロバン攻撃を続行した。

25 幻の戦闘機隊の終焉

我々はバコロド飛行場に数機残っている単を見つ、この飛行機を第31戦隊で貰うことにして、2機を空輸、他は分解して貨物自動車で運び出した。これらの飛行機を加えるとファブリカ基地の保有機数は約10機になった。

これらの飛行機で相変わらずタクロパンの攻撃を続けていたが、2月下旬、マニラの第一線が突破された頃、レイテ島の米軍司令部は本格的に幻の戦闘機狩りを始めた。

昼夜を分かたず、ファブリカ基地上空には米軍の戦闘機、哨戒機が飛び回り、夜間には夜間戦闘機やB24爆撃機が灯火のあるところは無差別に銃撃、爆撃するようになった。

3月8日、コルセア F4U 艦載戦闘機が20機の編隊で飛行場はもとより周辺のジャングルをくまなく銃撃していった。



コルセア F4U ワイルドキャット

出動しない飛行機は全部燃料を抜いて燃えないようにし、飛行場には破損した囀の飛行機を置いておいたが、無差別に銃撃していったので、殆どの飛行機が被弾し、特に発動機のシリンダーに銃弾を受けて処理の仕様がなくなった。遂に、出動できる飛行機は一機も無い状態になった。

僅かに、破損した飛行機の発動機、胴体、尾部を集めて、幽霊飛行機を2機作ったが、一機は震動が激しく飛行は無理であり、他の一機も長時間の飛行は出来ず、出撃する能力のない飛行機であった。ここに、飛行第31戦隊は出動可能機が完全に0となってしまった。

幻の戦闘機隊は遂に終わってしまったのである

26 転出命令

3月10日、遂に第二飛行師団司令部から、第十三飛行団および飛行第31戦隊に転進命令が出た。

私は2月末に作った、残置する者と転進する

者の名簿を発表した。

体の弱い兵士は自動車で輸送し、飛行機でボルネオ等に送り込み、残置する者は第二飛行師団の直属として上陸する米軍と徹底抗戦する部隊となる計画である。

先発隊に選ばれた兵士達は、皆我々も是非ここに置いてくれと嘆願するので、その説得に苦労した。

ボルネオへの輸送は飛行第50戦隊が担当したが、次々に輸送機が故障し、更にその1機がP38に撃墜され、予定通り進まなかった。

3月13日になって、やっとボルネオの第十飛行団の九七式重爆撃機が迎えにきたので、第十三飛行団長江山中佐と飛行第31戦隊長西少佐に搭乗をお願いしたら、二人とも現地に留まるとして頑として搭乗を拒否された。成瀬少佐と私が、ボルネオに前進して各司令部を巡って、後続の輸送機を送る手配をしてくださいと懇願したので渋々搭乗してくれた。

後続の輸送機は殆ど見込みがないと考えねばならぬ。既に、ネグロス島の隣のセブ島には米軍が上陸し守備隊と交戦中であり、米海軍の高速魚雷艇がネグロス島のシライ地区にロケット砲攻撃を始めた。第二飛行師団司令部の大部分の隊員は鈴木参謀と伝令および通信隊を残してギンバラオ陣地、シライ山の方に退避することとなり、我々全員出発の準備をしていた。

27 米軍ネグロス島へ上陸

3月29日夕、米軍がバコロド市の南に上陸を開始し、守備隊との交戦が始まり、砲撃の音がシライ町の窓を震わせ始めた。米軍の高速魚雷艇がシライ町に一齐にロケット砲の攻撃を始めた。

ギンバラオ陣地の方を見ると抵抗陣地の方に移動する各部隊の自動車の光が真っ黒な山影に宝石をちりばめたように見えたのが印象的であった。



その夜、バコロドの守備隊は上陸した米軍に夜襲をかけ海上に撤退させたという情報が入ってきた。

28 最後の別れ整備隊長ネグロス島を脱出

3月30日、全員に撤退の準備を命じ、それを確認しているところに、第二飛行師団司令部の鈴木参謀から司令部に出頭せよとの連絡があり、司令部に出頭すると、第二飛行団長より、今夜影山大尉の輸送機が来るので、ボルネオに脱出せよとの命令を受ける。

「私は今まで手紙3通、電話で2回その命令を受けています。しかし、私は飛行第31戦隊の残留人員と一緒に死なせてください」と懇願しても、鈴木参謀に「メナド基地に展開していた第31戦隊の整備員は陸路マカッサルに移動して、その港から巡洋艦足柄でシンガポールに送る予定、是非、シンガポールで戦隊を再建してくれ、残置部隊は俺の生命をかけても引き受けるから」と説得され、やむを得ずそれを承諾した。

そして、その夜、飛行第15戦隊の影山大尉の飛行機でサラビア飛行場を出発して、ボルネオに向かい、予定のサンダカン基地は空襲があったので、タワオ飛行場に着陸した。その影山機は給油の後またネグロス島の残置人員の救出に向かった。

29 飛行第31戦隊の最後

しかし、皮肉なもので、今まで空襲で幾度となく死地を切り抜けてきた私は、このボルネオのタワオに脱出した直後、ロッキード P38 の機関砲地上掃射により右胸貫通弾を受け、瀕死の重傷により負傷者収容所に収容されてしまった。

そして、6月中旬2ヶ月近くの療養でやっと歩けるようになり、ボルネオのポンチャック市、クチン市を經由して、シンガポールに到着した。

早速、第三航空軍に出頭すると、私が負傷して再起不能ということで、第十三飛行団、飛行第31戦隊はこのシンガポールで解散してしまっていた。

セレベス島のマカッサルより巡洋艦足利で運ばれてきた飛行第31戦隊の整備員の一人は第三航空軍の所属の当番兵として負傷した私の世話をしていた。

シンガポールの各地には、私を迎えるべき故障した隼戦闘機が沢山空しく残っているのに、今となっては解散した戦隊を再建する術もなか

った。

私は、ここで遂に飛行第31戦隊が幻の戦闘機隊として消えていったことを思い知らされた。(第1部完)